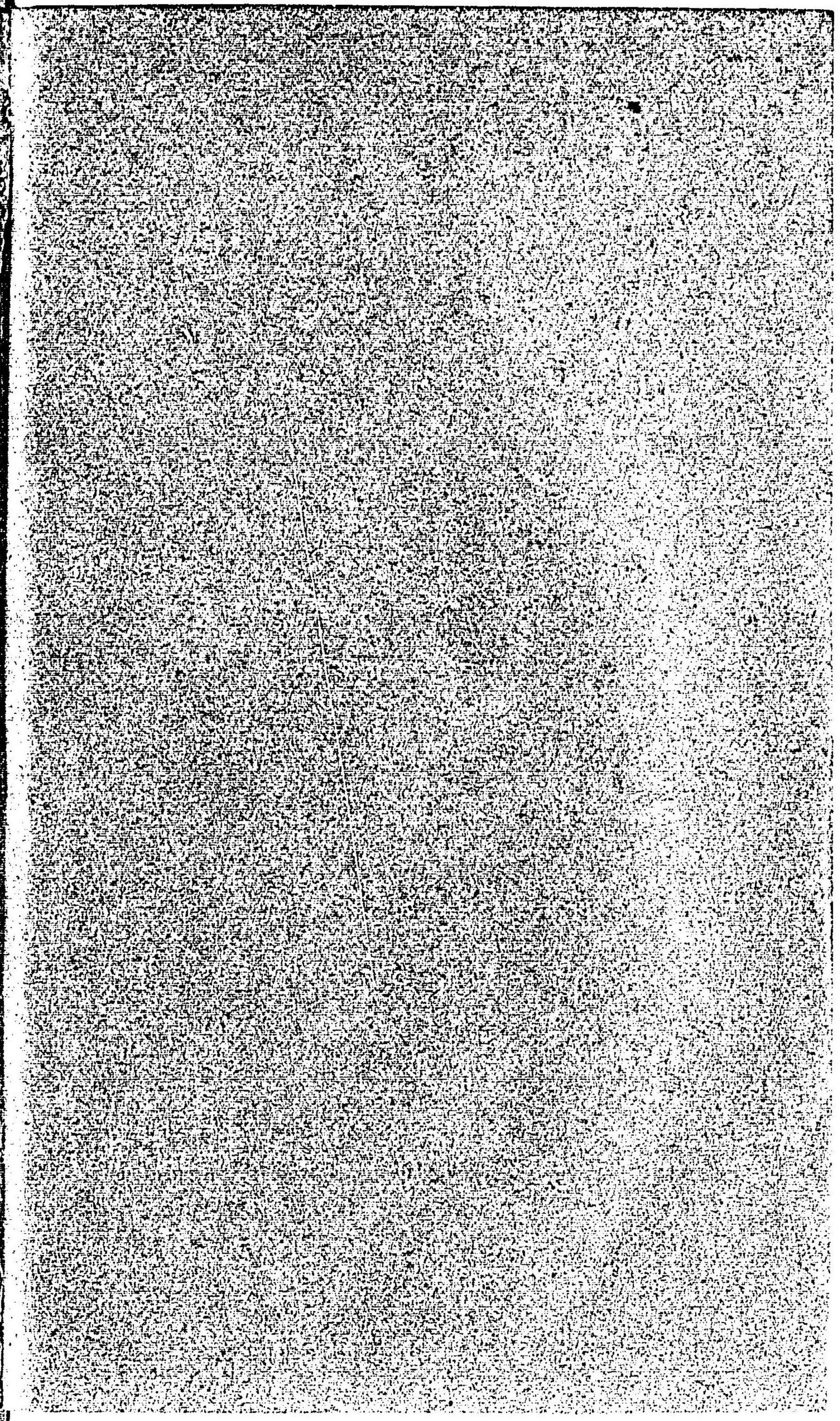
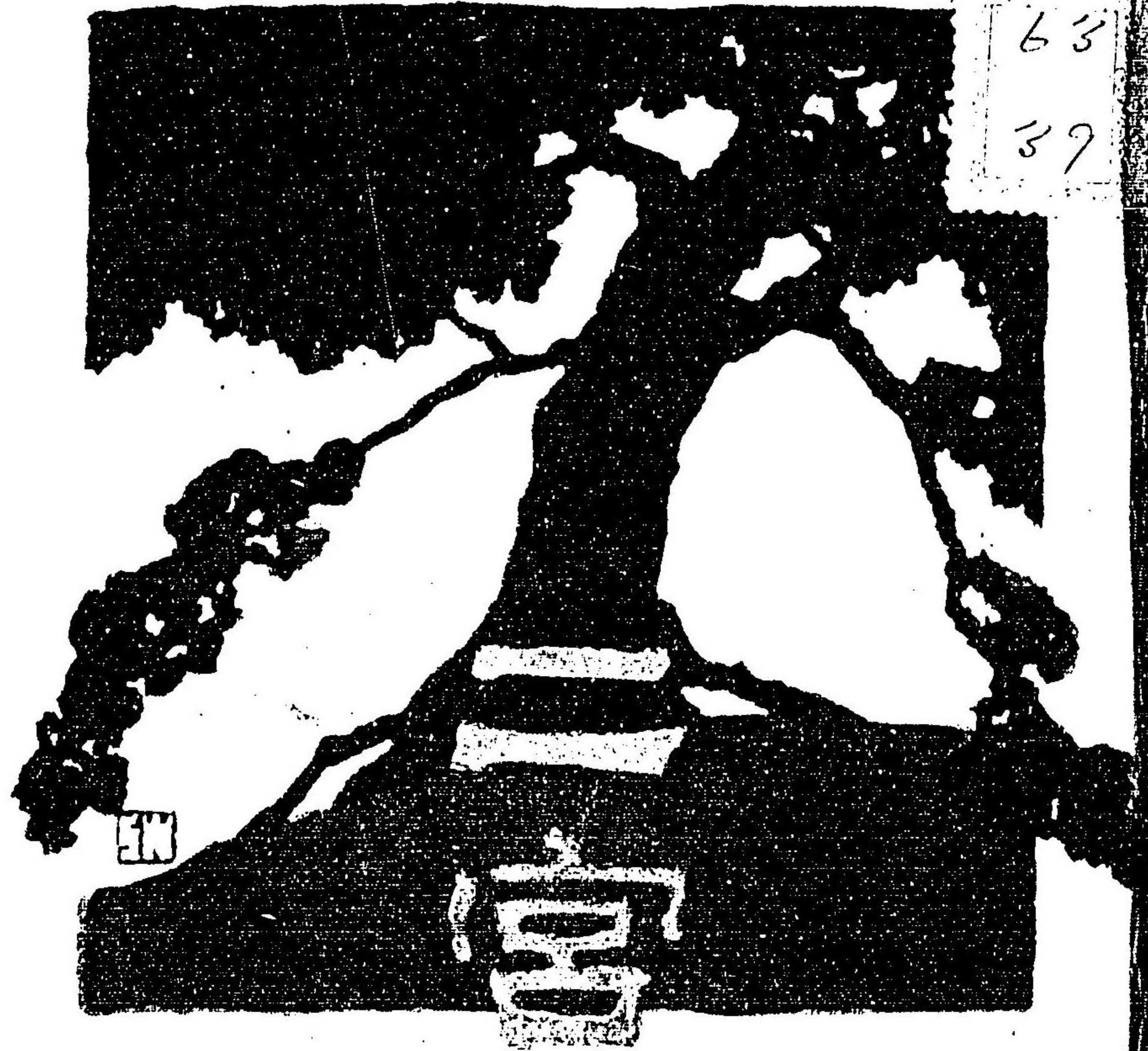


63

39



63-39

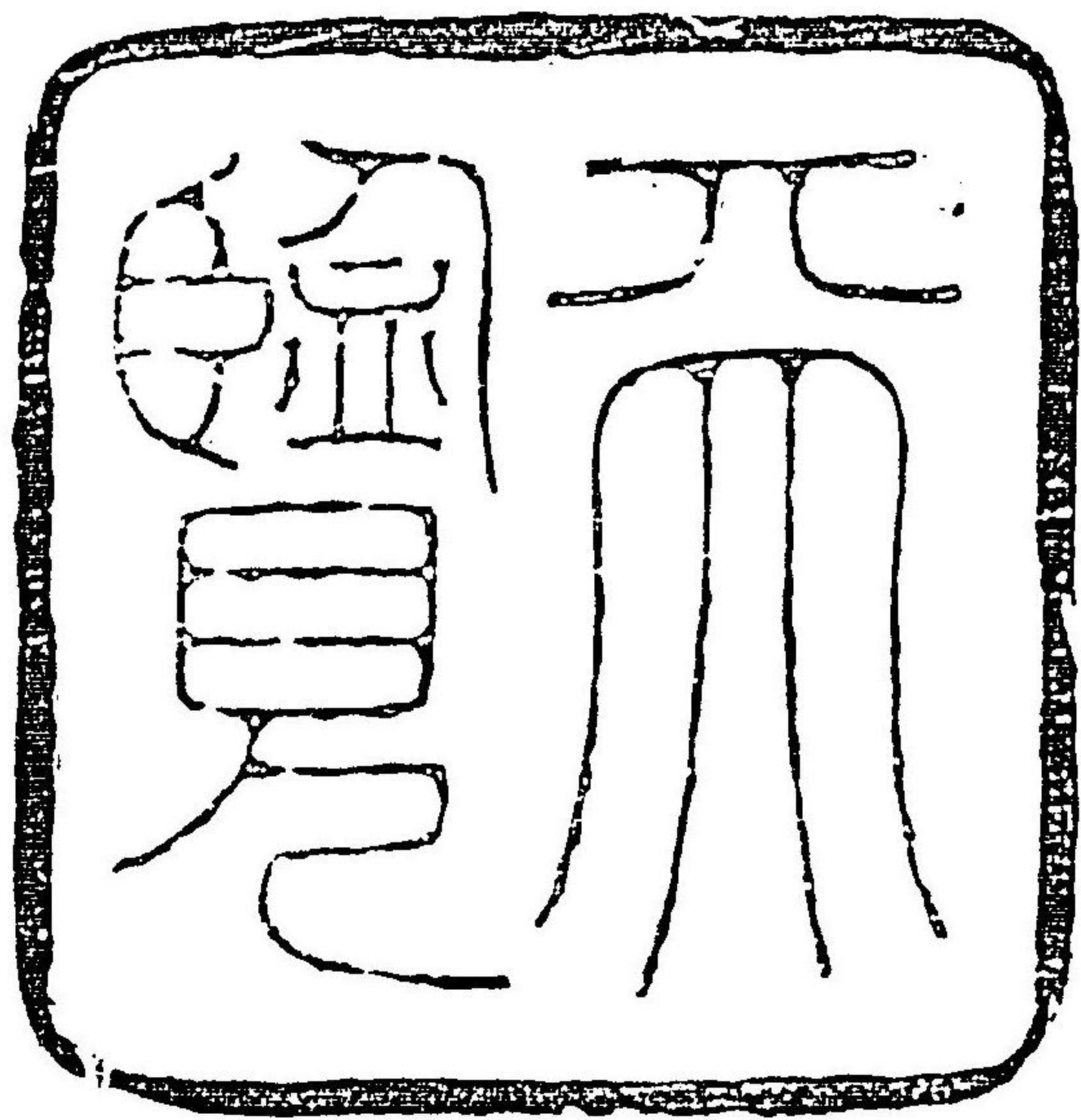
二宮尊德

後篇

内務次官 一木喜徳郎君序
家庭學校長 留岡幸助君坐右銘題
碧瑠璃園作
渡邊審也君裝畫



興風叢書第二卷



新編四

古法地境

卷一 禮記

卷二 禮記

卷三 禮記

卷四 禮記

卷五 禮記

卷六 禮記

一日 禮記

理ハ以テ人ヲ伏ス可ク情ハ以テ人ヲ動カス可シ而シテ二者其
ノ一アルモ未ダ以テ人心ヲ服スルニ足ラザルナリ蓋理ニ專ナ
ル者ハ之ヲ恬淡ニ失ヒ情ニ專ナル者ハ之ヲ偏僻ニ失フ情以テ
理ヲ行ヒ理以テ情ヲ裁シ情理相貫通シテ而シテ後人心之ニ歸
ス是故ニ古ヨリ豪傑ノ士徳化ヲ當世ニ施セル者必ズ人ヲ伏ス
ルニ足ルノ理アリテ而シテ人ヲ動カスニ足ルノ情ヲ兼ネザル
ハナシニ宮尊徳翁ノ如キ寔ニ其ノ人ナリ翁ノ廢邑ニ臨デ手ヲ
興復ノ事業ニ下スヤ積弊立ニ除キ汚俗洗フガ如ク遊惰悍驚ノ
徒變シテ勤勉順良ノ民トナリ一郷靡然トシテ風化シ餘澤遠近
ニ及デ四方其ノ徳ヲ仰ガザルナシ是レ皆至醇正大ノ理人ノ心
胸ニ徹シテ仁厚博愛ノ情人ノ肺腑ニ入ルモノアルニ由ラズン
バアラズ碧瑠璃園爰ニ二宮尊徳ノ著アリ體ヲ小説ニ假リテ翁

ノ一生ヲ描寫セントシタリ敘事精緻ニシテ情趣深厚人ヲシテ
躬其ノ境ニ在リ其ノ人ニ接スルノ想アラシム抑々翁ノ本傳ニ
ハ富田氏ノ報德記アリ其ノ餘翁ノ言行事業ヲ錄スルノ良書世
ニ乏シカラズ然レドモ皆理ヲ主トシテ而シテ情ヲ主トセズ是
レ固ヨリ事體ノ然ラザルヲ得ザル所ナリ碧瑠璃園ノ著ニ至テ
ハ蓋其レ情ヲ主トシテ翁ヲ傳スルノ嚆矢ト謂フベキカ頼ニ此
著アリ庶幾クハ翁ノ情理兩ナガラ之ヲ後代ニ傳ヘテ以テ永ク
人心ヲ感化シ民風ヲ善導スルノ資料ト爲スコトヲ得ンカ其ノ
人目ヲ娛マシメ人心ヲ快クスルノ效ニ至テハ稗史小説ノ常必
シモ故ラニ之ヲ論ゼズシテ可ナリ

明治四十二年五月

一木喜徳郎



向上主義

人動しすれど、下の方に目を下すに比較するものあり、これ必ずしも
者なり、かたは、下の方に目を下すに比較するものあり、これ必ずしも
時間を経ずし、而かも大體を依りて、なほよりは宜しからん、
或は消を存せし、而かも大體を依りて、なほよりは宜しからん、
らる、わは、或は女は、而かも大體を依りて、なほよりは宜しからん、
か宜しからん、其の比較するものあり、下の方に目を下すに比較するものあり、
右に反して、常に上の方に目を下すに比較するものあり、これ必ず
ず、強家に、その言ふ所、而かも大體を依りて、なほよりは宜しからん、
希くは、かたは、下の方に目を下すに比較するものあり、これ必ずしも
われを以て彼に比す、甚だ愧ぢたり、われ及びながら、人の人を、
と、其比較するものあり、常に上の方に目を下すに比較するものあり、
此の如きものは、技藝、すく、進歩し、その人格、すく、高く進歩するものな
り。

二宮尊徳後編

碧瑠璃園

第一章

(一)

昨夜より降り續きたる雨は、今日の正午に降り續きて止む様無し、秋も半
を過ぎて庭の樹々に黄なる葉、紅き葉、縮れたる葉、卷きたる葉、病みたる
葉の様々物淋しく、西の方から吹き渡る風に揉まれて、蝶の如く散るもあり
笛の如く鳴るもありて、晝の雨は一際寒し

陣屋といふは名のみ、壁は落ちて、骨の現なる處に名も知らぬ蟲の音は細
り、底は傾きて、瓦の落ちたる跡に茫々たる草は生うる、草には露あり、露
の一つ一つに秋の哀れは宿りて、今日も空しく暮れんとする短き日の命と掛
りぬ

「岸右衛門め、今日も獸を真似ると見ゆる喃」

金次郎は今年四十一の秋を迎へぬ、櫻町恢復を心に誓ひて、この陣屋に居を定めしより、早や足掛四年となりき、故郷に在りし時とは異りて、頬の肉も瘦せたる事よ、眼の肉も落ちたる事よ、更にその唇の色も褪せたる事よ

櫻町の恢復は意外の難事なりき、櫻町の住民は意外に遊惰なりき、櫻町の田地田畑はあはれ意外に荒蕪なりき

荒れたる田地は耕作の仕様に由りて、舊態に復することを得ん、されど人心の遊惰廢頹は一年の説法、二年の誘掖、あらず三年五年の長の間、あらゆる精力を費すとも、十分に望みを遂ぐることは能はざらん、金次郎は土地の恢復興隆よりも人心の改善誘導に精を籠めき、人の心もし善に向は、田地田畑は期せずして善く成り行く筈なり

「岸右衛門獸ではござりませぬ、岸右衛門正しう鬼でござりまする」

すやくと眠る彌太郎を懷に抱きて、妻の歌子は次の間に襦袢木綿を縫ひ居たりき、髪は亂れ、美しき頸筋は垢染みたれど、一片犯し難き品位は、繼

刺せる夾衣の襟に保たれて、置く霜の白きが下に咲く菊の花の香ふにも似たりけり

「いかにも鬼ぢや、獸は人に懐く時もあるが、鬼の人に懐く事はない」と金次郎は頻りに耳を傾けつ、「憐れ鬼が明日食ふ餌の用意もなくて、今日を命と戯れ居るよの」

しとくと降る雨の音に交りて、何處よりともなく三味線太鼓の音響き來る、今しも一村滅亡の悲運に迫りて、遠く母藩より仕法の人を遣はせられたりといふに、半を黒き雲に掩はれながら、その下より鄭聲は聞こゆるなり、木枯の音吹きさすむ山里にも、鬼もすれば狂花の咲く習ひあり、今散らんとする櫻町に、斯く面白げの樂を聞くこと、宛ら亡國の音かとも思はれて、金次郎は不覺に憐れを催すなりき

「岸右衛門にも困つたものでござります、承はればあなた御仕法の前に立つて、悪いことばかりを云ひ歩くさうでござります」

「物の數では無い、黄金の出る山の道にも、忌はしい茨はある世ぢや」

「岸右衛門一人ならば兎も角もござります、徒黨の人数を語らうて、御仕法の妨げ致すは、恕し難い曲事と存じまする」

「捨て置け」と金次郎は事も無げに「もう少し廻つて来る」

「又お出掛けでござりまするか」

「彼等が酒に浮かるゝ間に、乃公は村の礎を築いて置く、彼等が温い夢を結ぶ中に、乃公は仕法の一條を行て置く」

金次郎は云ひながら懐より握り飯の石よりも堅くなりしを取り出しぬ

「今日は午飯食ふ時無くて過ぎた、こゝで終まさら」

「御飯召し上りまするか」と歌子は精悍しく「まづ待たせませ、只今お茶を漉かしまする」

「茶などは要らぬ」

「さらばお白湯にても……」

「白湯も入らぬ、水で澤山ぢや」

握飯を茶碗の中へ投げ入れて、その上より冷たき水を打ち掛けつゝ、さら

さらと食ひ終ひて

「これで終んだ、さ、廻つて来やう」

是即ち金次郎が食事の法なりき、握飯の菜には例として焼鹽只一摘みを添ふなりき

(二)

「あなたお待ち遊ばしませ」

金次郎が半ば朽ちたる長廊下を歩み行くうしろより、歌子は斯く呼び止めて、つかつかと走り寄りぬ

「お衣服が甚う垢付いてござります」

「衣服は垢付いても、心は垢付かぬ」

「お御夾衣はまだ新らしいのがござります、お召し替へ遊ばしては何うござります」

「いや、この衣服尙用ゆるに足る」

「でもお見苦しくはござりませんか」
「衣服の垢付いたのが耻辱ではない、此地の人も心の垢を洗うて呉れる時が来ねばならぬ」

「この雨の降るに、又御檢分でござりまするか」と歌子は流石に涙合ひ
「私は櫻町へ遊びに来て居るのではない、雨の降る日も同じやうに食事をす

る」
「風も甚う吹き添ふやうでござります」

「風の吹く日も同じやうに呼吸をする」と金次郎は云ひ捨て、「彌太郎に氣を付け」

「御機嫌よく在らせられませ」

「日が暮れたらば歸る」

歌子の目にも見堪ねたる垢付きし衣服の上より、散れたる合羽を着、じとじと冷たき草鞋を穿きて、悠然と出で去りき
彼は如何なる大雨にも、いかなる暴風にも、又いかなる寒威にも暑氣にも

恐る、慮なく、日ごと櫻町の領内を巡視巡廻して、軒別に疲弊回復の道を説き聞かすを務めとしき、兼て勤惰善悪を見歩くを務めとしき
「農事に精を出さつしやい、父母に孝行を盡さつしやい、お前方の先祖が草分をした村々を以前の立派な様に返さつしやい、此分では村が亡る、村が亡びて農民の立ち行く筈はない、命を大事、村を大事と思ふ者は、一生懸命に家業を勵まつしやい」

これ金次郎が逢ふ人ごとに云ひ聞かせ、説き聞かせたる詞なりき

「旦那様、お願いがござります」

金次郎が物井村八幡社の前を通行せんとする時、散れたる番傘に雨を凌ぎて、足早やに來掛りし年若き男、其儘金次郎の前に蹲る

「お前は勘十でないか」

金次郎は物井、横田、東沼の三村に互りて、凡そ櫻町領に屬する人間、家屋、田畑、森林、物として知らざる無かりき、彼の田地は如何に瘠せ居れる、彼の屋はいかに頽破し居れる、又或る人間の性質の善きか悪しきか、又或る

森林の立樹の太きか細きか、一として辨へ知らざるはあらざりき

「よく御存じでござります、私まだ旦那様のお前へ出た事はござりませぬ」

「詞を交したことは無くても、お前の顔は熟く知て居る、何事ぢや」

「この雨中をお役目として御巡廻御苦勞に存じます、是は眞のお粗末な物でござりまするが、お八ッの代りに献上致すでござります」

芋と椎茸とを煮べにせるを鉢に盛りて、恭々しく前へ出しぬ、雨は少しく小歌となりて、八幡の社頭に鳩の鳴く聲頻りなり

「それは何ぢや」

「お煮べでござります、これに結び飯も用意してござります」

勘十と呼ばれたるは、袖の蔭より小さな重箱を取り出しぬ、金次郎は見向いても見ず

「左様な物は要らぬ」

「それでは不本意、是非お召し喫り下さりませ、この握飯は私の祖母の七十になるが拵へたのでござります」

「ではめらうが平に断る、私は今食事をした處ぢや」

「さらば此ほどに申すを、お納めは下さりませぬな」

「どうあつても納めぬ、まづ物の理りを考へて見よ、お身達農事に惰けて、耕作に誠實の心を缺いた爲め、今の如な困窮な様となつて、遂に小田原お殿様のお耳へまで入た、私はそのお見出しに預つて、當村恢復の御用を勤むる、申さば當方から一兩の金子でも恵み與へるが當然ぢや、それを却てお身達から物を恵まれては、小田原公へ對して濟まぬ」

「成るほど喃」と勘十は輕侮の色を目の中に見せて「流石は旦那その事をお心付きでござりまするかな。是ほどの大事を腕一本で爲さらうといふお方、他人の物は貰ひ得、只では舌でもお出しなさらぬ御家風かと思へば、やつぱり御遠慮がござりまするかな」

「私も其爲めに千辛萬苦をする、幸ひに私の力でお前達の身を安んじ、兼てはお前方が以前の如く、衣食に事を缺かぬ身分となつたら、その時は馳走になる」

「前の事は兎も角、毎日々々の御廻り、さぞお疲れと存じます、物井村の岸右衛門、ちよと御意の得たい事もある氣、恐れながら岸右衛門新家までお立ち寄り下さることは能きませぬかな」

「岸右衛門は今日も三味線など弾いて居るやうぢや、遊興の妨げをするも氣の毒、殊には雨天、明日にも参るであらうぞ」

「三味線を弾いて居るのは、岸右衛門ばかりでもござりませぬ、と勘十は顔を押して「何もござりませぬが、御酒を一獻さし上げたいと申して居ります」

「折角ぢやが酒は餘り呑まぬ」

「御酒がお嫌ひなれば、お茶にてもさし上げます、實は岸右衛門新宅へ、村名主總年寄、若い者皆な寄り集つて居りますので、是非とも旦那にお出でが願ひたいと申して居ります」

「うむ、名主年寄その他の者も参り居るか」

「旦那へ御相談致したいこともあるやに申します、平にお立ち寄り下さりませ」

「さらば参る」と金次郎は凛として「案内を致せ」

(三)

「旦那のお入來ぢや、二宮の旦那のお入來ぢや」と勘十は外にて喚く

今まで聞こえたる三味線の音止んで、表の障子を内より開く、八疊わまりの座敷に車座となりて、狼筈たる杯盤の中に、胡坐かくもの、蹲る者、臥そべる者、話する者、人数は八九人もあるべし、其姿は様々なれど、泥の如く酔ひ居れるは皆同じ

「や、これは」と岸右衛門は居住居を改めて「二宮の旦那、ようお入來下さりました、まづこれへお上り下さりませ」

「皆が機嫌ぢや喃」

「と申すではござりませぬが、今日の雨で仕事も能きず、寄り合て雨祝ひの盃を擧げて居るのでござります」

「は、雨祝ひか」

「雨は何日降ても好い者でござります」と岸右衛門は再び「まアお上りなされては何うでござります」

「此通りの風體ぢや、話があれば是で爲る」と金次郎は縁外に立ちたるまゝ、

「や、丹藏も居るか、作兵衛も同席ぢやの」

「へえ」と丹藏は膝の上にて手を突いて「毎日々々御儉約の説法を承はるばかりが能でもござりませぬでな、今日はちよと骨休めをして居るのでござります」

「それは結構ぢや」と金次郎は一朶の白蓮水の中に立つが如き態度して「お前は百姓であつたの」

「左様でござります」

「年齢は幾歳ぢや」

「二十六歳でござります」

「男の盛りぢや、親はあるか」

「双親とも揃うて居ります」

「人間双親の揃うてあるほど幸福な事は無い、大切に孝養の限りを盡さねば相成らぬぞ」

丹藏は岸右衛門と顔を見合せたるのみ詞なかりき

「秋の雨は農家にあつてさほどの歡びにもならぬ、殊に近頃雨が多い、畑物には餘るほどぢや、その雨にも酒買うて祝ふぢやの」

「この雨を田植時に降らせて下さるやうと、お祈り申すのでござります」と作兵衛と呼ばれし三十男が口を添へぬ

「お前に云うて居るのではない、控へ」

破鐘の如き聲、爛として明鏡を懸けたる如き眼、金次郎は蕭々と降る雨を浴びて、縁の外に立つと立つ、作兵衛は二言なかりき

「丹藏に尋ねる、今日の様な雨の日に、お前の双親は何をして居る喃」

「親父は草鞋作ります、お母は綿を紡ぎます」

「さうして倅のお前が、用もない雨祝ひをして他人の家に酒を飲むか」

「へえ」と丹藏は頭を掻いて「これは交際でござります」

「は、交際か、岸右衛門勘十などに交際する為め心にもない遊びをするか」と申すでもござりませぬが……」

「ぢやが同じ交際なら好い交際を致せ、雨の降る日は家に閉ぢ籠つて、一足の草鞋でも餘計に作る、これが百姓の分ぢや、人は分を守る心が大切、分を越えると破滅が近づく、雨祝ひ骨休めと申すなら是非もないが、お身は岸右衛門など、違つて當村では指折の舊家ぢや、他人に交際ふ暇で何故親に交際はぬ、盃を持つ手で何故草鞋を作らぬ、今飲む酒がお身の肉になると思ふか」「肉には為らいでも楽しみになりませぬ、旦那は何かと云ふと、家業に精を出せ、無益な事に金を費すなとお云ひなされますが、人間もさうく働いてばかりは居られませぬ、偶には面白い歌の一つも謳つて、骨を休めて遣りませいで、精も根も續くものぢやござりませぬ」

「日頃は精が出ると思ゆるの」

「村中の賞められ者はこの丹藏でござります」

と岸右衛門は口を挿む、岸右衛門は四十二三の荒くれ男、酒に熱る顔は火の

如く赤く、眇眼ながら爛々と善く光りて、抜け上りし額口に絶えず殺氣の閃きありき

「さらば聞くが、山際の荒蕪地、取り急ぎ開拓くやうに申し付け置いた、もう手を付けて居やうの」

「いえ、爾うは爲りませぬ」

「まだ其儘か」

「人間の力には限りがござりまするでな、私方にも少々の田地を持って居りませるでな」

「それは分つて居る、少々は田地持て居る程の者が、前に立て鋤をおろして呉れぬと、小前の者が骨を折らぬ理ではないか」

「すると旦那は、荒蕪地を拓く爲めに、一方の上田を草原にしても好いと被仰るのでござりまするか」

「お身はもう少し事を存じ居るかと思ふたに、存外の口上ぢや、あるだけの田地を耕作するだけで好くば、小田原公から仕法のお役人をお遣はしには

相成らぬ、いつも云うて聞かすことぢやが、今から百二三十年も前、元祿正徳の頃は櫻町の石高四千石、民家四百四五十戸、年貢の米ばかりでも三千百苞から納めて居る、それが當今の状態はどうぢや」
「其御講釋なら、耳に蝸が當つて居ります」と丹藏は頭を押へて奥の間へ逃げ込みき

金次郎は其後を見送りて悵然たり

(四)

「もし旦那へ」と縁側に腰掛け居たる勘十は身をにぢらせて「もう好い加減に爲されては何うでござります」
「いや」と金次郎は屹然と立たせ、「お前の様な虚言家に物は云はぬ、お前は今名主年寄皆なこれへ参り居ると云うたでないか」
「これへお入來になつて居りましたが……」と作兵衛を見返つて「どうなれたのでござりまするな」

「二宮の旦那がお入來と聞いて、逃げるやうに歸られたよ」と作兵衛は嘲る如く「旦那が恐いことは無いが、例の講釋が煩厭いでの」
「物を聞かぬと思ふほどの豊は無い」と金次郎は咳くやうに「豊に話をするは愚の至りぢや、名主が居ぬとあれば歸る」
「旦那、まづお待ちなされませ」
岸右衛門はふつとり肥えて、背切たる身を進めぬ
「岸右衛門、用か」
「承はれば近頃加賀越後の氓民を此方へお呼び寄せなさるさうでござりまするな」
「此様に百姓が足らいでは、何をするにも事が辨じぬでの」と金次郎は莞爾ともせず「年々の飢饉に産を失うて、この遊り漂ひ歩く北國の百姓があると、聞いたゆゑ、それに相應の金を與へて、此村に住はせる事とした、近々の間二三十人も参るであらう、他國者と侮つて疎遠して呉れてはならぬ、關東北國と境は距つれど、やはり同じ日の本に生れたものぢや」

「私は旦那の爲さる事が、一圓腹へ入りかねます」

「私の爲ることがお前の腹へ入りぬといふか」

「どうしても合點が参りませぬ、と申すは北國者に金を與へて、能くお呼び寄せなされいでも、櫻町に人間は餘るほどござります、お地頭様の御政治が行き届かいで、年々疲弊には至つて居りますが、それでもまだ腕はござります、足も臍も立派にござります、金さへあれば一人前の稼ぎをする者が、此處にも五七人はござります、それをさて置き、他國者に金で呉れて、此村へお引き入れなさるのは、あつ分つた、こりや何でござりまするな、自分に昵近した者ばかり呼び寄せて、代々此村に住んで居る生拔の百姓を投げ出し、櫻町四千石を自分の物になさるお心でござりまする喃」

「怪しからぬ事を申すの」と金次郎は一聲高く「左様な事ある筈はない」

「でも私には爾う見えませぬ」

「他國の者にも金を與て呼び寄せやうといふほどぢや、村の者も誠實に働きさへすれば、いかやうとも褒美を遣る、賞罰を明かにして當村の恢復を謀る

のが、私の心ぢやといふことを、度々申し聞せて居るではないか」

「すると旦那は私共の爲ることを良くないと仰せなさるのでござりまするな」

「秋雨の降るを託けて、村の若い者呼び集め、酒宴遊興を事とするお身達に、褒美を遣ることは能きぬでの」

笑ひながら去らんとするを、岸右衛門は又呼び止め

「まづお待ちなされませ、私あなたへお願ひ申したい事がござります」

「何事か存せぬが、今夜にも陣屋へ参れ、乃公は是から名主の家へ行かねばならぬ」

「名主様へお行での御用は、水帳のお話ではござりませぬか」

「いかにも爾うぢや、水帳が無くては村々の境界も立ち難ねる」

「然し旦那、それは無駄でござります、旦那がいくらお云ひなされても、古い水帳は疾から紛失して居ります」

「お前の知つたことぢやない、控へて居れ」

「この雨の日に徒足をお踏みなさるは、要らぬことぢやござりませぬか」

「お身の厄介にはならぬ、捨て、置け」

金次郎は少しの歌間もなく降り頻る雨の中を、足早に出で去る時、奥と此間との取合の袂を開けて、密と顔を出したるは、數年前小田原公より派遣せられたる代官鶴岡權太夫なりき、年齢は三十八九、色飽くまで黒く、鼻筋通りて、眼の色どんより鈍さが、口の側に冷かな笑を漾えて

「岸右衛門、巧く遣たの」

「お指圖通りでござります」

「斯ほど云はれても耻辱とせぬ、金次郎は魯鈍な奴ぢや」

權太夫は縁の端に突立ちて、金次郎のうしろ姿を見送りぬ

「旦那、お熱いのがござります、まづ一つお喫りなされませ」と岸右衛門は媚びるが如く云ふ

(五)

境界は一村綱紀の關る所、もし村と村、家と家、字と字との境遇正しから

ずば、その村、その家、その字に於ける紛擾の絶ゆる時あらざらん、人の心と正さんとすれば、まづその家を正さざるべからず、その家を正さんとすれば、まづ其字、その村を正さねばなるまじきなり

然も櫻町には古き水帳あらざりき、金次郎は此地へ着くと共に、第一に水帳を見んとしたれど、名主も庄屋も「紛失してござりませぬ」とて出さざりき、金次郎は夫が爲めに一方ならず苦慮せるなりき、新に檢竿を入るゝ事の困難なるは、金次郎も亦熟く知る、彼は如何にしても紛失せる水帳を探させ、境界を明かにせねばなるまじと思ひぬ

天も亦金次郎の境界に同情するなり、同情して時を傷む涙を下すなり、雨は小歌もなく降る、然も横ざまに霏々として降り付くる

金次郎は櫻町に來りてより、一日だも身を休めたる事あらざりき、一時だも心を休めたることあらざりき、櫻町四千石の恢復興隆は彼が半生の事業として必ず善く爲し遂げんと心に誓ひ、小田原公に誓ひ來りたれど、恢復興隆の事業の外に、土地の反對者と戦はざるべからず、曲りたる道を行く者は、

正しき道を行く人の伴侶となるを厭ひて、深き淵に陥れんとする事、往昔よりある例なれば、それに伴ふ多少の困苦は、金次郎最初よりの覺悟なれど、現在小田原公の祿を食み、小田原公の深き思召を體し、櫻町一體の疲弊廢頽を救はんとして出張せる代官、及びそれに附隨せる役人に、多くの反對あるべしとは、流石夢にも思ひ寄らぬ處なりき

鶴飼權太夫もし正直忠義の侍ならましかば、金次郎が死を決して櫻町興復の爲めに出張し來り、天の明くるより日の暮るゝまで、草鞋の底の綿の如くに敝れ、衣服の裾の海松の如くに千切るゝまで領内の村々を東奔西走し、晝食にも夜食にも石の如き握飯、それに冷水を打ち掛けて、僅かに飯を凌ぐのみ、夜に入りては一穗の燈火を伴として、土地の舊記を調べ、農民處世の法を考へ、時には古老の誰彼を招きて、彼の主義たる興農、分度、誠實の理を説き聞かせ、疲勞堪へ難くなりて漸く枕に就く、然もその就眠時に二胸(今の四時間)以上を費したることなし、子刻(夜の十二時)に寐ねて、寅の刻(朝の四時)に起き出で、具に明日探るべき仕事の順序を定め置きて、その日の事務は取

り掛る、故に萬事の處置、水の低きに就くが如く、少しの遲滯だも無き、古來例なき勉強精勵の様を見て、一は主家の爲め、一は自個の爲め、又一には領主宇津家の爲め、金次郎の仕事に能さるだけの便宜を與ふべき筈なれど、權太夫は思ひの外の小人なりき、武士にあるまじき嫉妬猜疑の念深かりき、彼は金次郎が微賤しき百姓より見出されて、士分の取扱ひを受くるまで、主人加賀守殿に信用を得たるを歡ばざりき、彼が殿の渥き思召を受けて、櫻町の疲弊を救ふべく、この地に來りしを歡ばざりき、彼をして名を爲さしむるを嬉しと思はざりき、少くも彼の手に由りて櫻町恢復の實の擧るを願はざりき

由て權太夫は一面に部下の小役人を使喚し、一面に岸右衛門勘十作兵衛など無頼の百姓を味方として、極力金次郎の仕法に反對しき、金次郎が一つ一つに積み上ぐる石崖は、權太夫一派の役人、岸右衛門一派の百姓の手に由りて、その後より直に破壊され行くなりき
百姓より選み出されたる土臭き手を以て、四千石の領地を昔の盛時に盛り

返さんとするさへ、難事中の難事なるに、その上この多くの反對あり、金次郎は實に四面楚歌の中にありて、泰然たる事山の如き態度を持し、徐に仕法の道を立てざるべからず、彼の相役としては彼の三幣彈正あれど、是とても恢復の業の難しきに倦みて、今は手を引かんとする色見えき

小田原十一萬石の家中に、才氣並ぶ者無しと呼ばれたる三幣彈正すら、櫻町興復の事業にはあぐみ果てぬ、されど金次郎は晏如たりき、雨後の如き矢彈丸の間に立ちて、飽くまでも奮闘せんとする勇氣ありき、身斃るれば即て止まん、一片の志氣幸に消磨せである間は、この事業を爲し遂げねば止むまじ、功を街ふにはあらず、身の譽れを願ふにはあらず、況して子孫の繁昌を願ふにもあらず、廢れたるを興すは人間當然の務めなり、曲りたるを正すは人間當然の仕事なり、錆の着きたる黄金を研きて、以前の燦然たる光輝を見するは、正しき人間の職として爲すべき事業なり

金次郎の覺悟は是なりき、金次郎の決心は是なりき、この覺悟あり、この決心ある金次郎の心は鐵なりき、將た巨岩よりき、何物が來り撲つとも、彼

には些の動きだもなかりき、少しの困却だもあらざりき

(六)

「父様、何處へ行かしやるのぢや、此の雨の降るに、今頃から何處へ行かしやるのぢや」

涙聲にて云ふ子供の聲は、金次郎が來掛りし破れ垣の中に聞こえぬ、村は衰へても、家は廢れても、菊の花は昔に塗らざりき、蕭々と降り注ぐ雨の下にも、黄なるが一瓣花を着けて、その垣根の樹に薫りぬ

「父様、あア父様」

悲しき聲は再び聞こえぬ、金次郎は立ち止る

「何處へも行かずに置いて下さりませ、此處は私の家でござります」

云ふ聲愈よ悲し、續いて聞こゆるはしは噎れたる男の聲なり

「吉よ、泣くなよ、泣いた處で、鬼が佛になる見込みはない、こゝは喃、も
う此方の家ではないのぢやよ」

「私の家ぢや、誰が何と云うても私の家ぢや」
 「はて、聞き分けのない事を云ふ、吉よ」と泣聲になつて「お前の目に彼の豊作の顔が見えぬかよ」
 「父様、豊作の叔父さんに謝罪つて下されいの、私はこの家を出るのが否でござるわいの」

この應答に仔細あるらし、金次郎は垣越しに覗して見る
 當家の主は音藏とて正直漢なり、岸右衛門一派の者が金次郎の仕法に反對するにも拘はらず、彼は比較的、金次郎に謳歌する者なりき、餘り正直に過ぐるほどなれば、人間としては立派なり、順良なる村人としては此上も無かるべき百姓なり

「否でも仕様がな、早く出て行け」
 奥の間より嗚鳴るやうに云ふは聞き覚えある豊作の聲なり、金次郎は愈よ仔細あるべきを察して、垣の下に佇みぬ
 「今出て行くがよ、おのれ此怨み何口か一度は晴らして呉れるぞ」と音藏は

例になく強い詞、後に續いて「吉よ、さア來」

音藏は片手に吉太郎の手を引きて、片手に破れたる雨傘をさし、風呂敷包の大きなるをその身が脊負ひて、小ささを二個までも吉太郎に提げさせ、進み難ぬる足を強て運び出すやうに、瀬戸口を悄悄出でぬ、吉太郎は八歳ばかりならん、兩の眼には霞の如き涙を流して、悲しげに幾度か振り返り見

「父様、まだ下駄が残つてある、彼を取て來て大事ないかよ」と慄へ聲に問ひ掛けぬ

「お前の物をお前が取るのぢや、何の氣兼ねは些とも要らぬ、ぢやが此通り荷物もある、もう、何の手にも提げられまいぞや」

「それでは豊作に預けて置こ」と健氣にも思ひ切りて「父様、今夜は何處に寐るのぢや」

「産神様の御拜殿でも借りやうかの」

「この寒いに御拜殿で寐るのぢやな」

「凍えて死ねばそれまでぢや」と音藏は怨みに堪へぬ聲にて云ひ「私は死ん

でもそなた死ぬな、そなたは後に生き残つて、この敵打つてくれねばならぬ」

云ひながらしとくと歩み来る、金次郎は垣の外に待ち受けて

「音藏、何處へ行くかの」と世にも優しき聲なりき

「お、二宮の旦那様、私こんな姿になりました」と云ふ聲に無限の衰氣は籠

る

「不憫さうに、吉太郎も泣いて居る、全體何處へ行かうと云ふのぢや」

「何處とさす方はござりませぬ、用があつて家を出たのではござりませぬ、

家がござりませいで、父子二人が産神の御厄介に参るのでござります」

「はて異なる事、此處がお前の家ぢやないかの」

「今日までは私の家、只今は鬼の住居でござります」

「鬼の住居とは喃」

「豊作に奪られたのでござります、僅の金に利が積んで、その抵當に奪られ

たのでござります」と無念の涙滂沱たり

「そなた豊作に借があるか」

「へえ」と音藏は頭を掻いて「女房が長の病氣、それも全快すれば法の立て方もあつたものを、嘆きと借金とを後に残して、去年の暮れ、死んだのでござります」

「其事は聞いて居る、而て借金が幾許ある」

「病氣の時に三兩、葬式の時に二兩、都合五兩借りたのが原で、今は二十兩

からも利が積んでござります」

「その抵當にこの家を奪られたか」

「家ばかりではござりませぬ、三反の上田、二反の水田、家財田畑悉皆合切

奪り上げられたのでござります」

「僅か五兩の金の抵當に……扱も無法極ることぢや」

「私も無念で堪りませぬ、二十兩の金があつたら、彼奴に投げ付けて遣りた

いやらに思ひまするが、何を云ふにもこの體裁で、二十兩の事は扱て置き、

一貫の融通も着させぬ、この様な土地に生れたのが不幸、豊作の様な者に

金を借りたのが不運、生きて甲斐のない世の中ゆゑ、いつそ死んで了はうか

と思ふ事も二三度はござりました、なれど吉太郎が不憫さうで死ぬることも
能きませぬ、例へ人様の軒に立てても、吉太郎だけは成人させて遣りたいと思
ひまするが、この村では耻も多い、この人氣では一杯の飯を恵んで呉れる人
あるまいと存じます、それで今夜は産神の拜殿に夜を明して、明日は他領へ
出掛ける心でござります

「いや、それは宜くない、まづ篤りと考へて見るがよいぞ、心ない草木でも、
生へ抜きの處を他へ移すと、得手枯枝が生きるものぢや、生れ故郷ほど好い
處はない、決して短氣を起さつしやるな」

「はい、御心切に有難うござります、然し旦那様、稻一反作るにも、水が
無うては育ちませぬ、肥料を與らぬでは實りませぬ、生れた土地ゆゑ離れた
くはござりませぬが、家が無うては住むことも出来ませぬ、恵む人が無うて
は乞丐することも協ひませぬ」

「まづ待て、ちと私に思案がある」

金次郎は斯く云ひて、つか／＼と裡に入る、裡には豊作が火鉢の前に胡坐

かきて、ぐび／＼と獨酌の最中なりき

「豊作寒いのを」

金次郎は口軽く聲掛けぬ、豊作は五十の飯を二三も超えたるならん、鬢の
毛に霜は戴きても、顔の色を淡紅に彩りて、欲火に光る眼の色、宛ら餘熱に
燃ゆるが如し

「誰方ぢやな」と淡暗がりの内庭を見覗して、座を起たんとする様も無かり

「私ぢや、二宮ぢや」

「お、二宮の旦那様、今日も御巡検でござりまするか喃」

「彼様に雨のそぼ降る日は、得手善人の袖が濡るでの」

「へえ、そんな事もござりまするかな」

豊作は熱燭を手酌にして、下物は乾物、外にそれの如く寝れたる音藏父子
の泣き居れるを知らざる如し

(七)

金次郎は内庭の中央につゝ立ちぬ、夕の暗は合羽着たる偉人の周囲を取り巻きて、袖の頭より落つる雫、しとくと玉を碎きぬ

「斯う淡暗い處には、何うかすると佛の泣く音が聞こゆるものぢや」

「此邊にはござりませぬ」

「無いとは云はさぬ、啾々と不思議な聲がする、はて何處であらうな」

「佛は此處にもござりませぬ」

「佛は鬼の真似を爲されぬ、はて何處かな」と故意と耳を敬てるやうにして

「私は毎日領内を見廻つて、人の善悪邪正と勤怠とを調べる、お前は随分酒

が好きで一年三百六十五日を、酒の香に浸されて居るといふが、どうぢや一

寸見て酒の善悪を見ることが爲さるか」

「夫は爲さず、香を嗅げば直ぐ知れます」

「は、習慣といふは豪い物ぢやの、乃公も斯うして日々民家を見て廻る、

お蔭で一寸見ると、人の善悪や勤怠が直ぐ分るよ」

「すると、酒も人間も同じと見えませぬ」

「酒は鼻で分けるが、人間は眼で分ける、眼と鼻との相違で、世の中は面白

く渡られる」と金次郎は笑ひながら「時に此家は音藏の住居であつたが、今

日は不在かの」

「もう音藏の家ではござりませぬ」

「一日の中に主が變るか、さて珍らしい」

「旦那にも御届け申して置きます、今日私の手へ買ひ取したのでござります」

「お前の手へ——それは芽出度いこと、承はればお前は酒と博奕に命懸けで出

精をするといふ、その功が現はれて、一軒の家屋敷を買ひ求めたとは實に芽

出度い、神も佛も正直をお守りと云ふからには、家を買ふ音藏が不正直で、

それを買ひ求めたお前が正直であつたのは云はいでも知れて居る、中々感心

ぢや、中々に優れたものぢや」

「世の中は割に正直な物でござります」

「私などは年中爪に火を點して、お役義大切とのみ心掛ける、それでもまだ頼れ掛けた陣屋の中を繕うて、雨漏のする廣座敷に住んで居るが、お前などは旨い物を食ひ、旨い酒を飲み、毎日々々懐手をして遊び歩いて、それで此様な家屋敷を買ひ求め、人間の價はこれで知れる、いや價と云へば此家を幾許で買うたな」

「相應の價で買ひました」

「相應の價といふと、まさか五兩や六兩ではあるまいの」

「雨は天から降る物でござります、金は地から湧く物ではござりませぬ」

「然し時に由ると、金の利息が家を生む事もある、私も小田原公お目鑑に由つて、當櫻町の仕法に參つたからは、御領内三ヶ村の御政治にも立ち入る場合がある、善悪邪正の鏡になつて、お前達の心を映す機もある、いかに納得づくの買買でも、法に外れたことは許し置かれぬ、役義に由つて調ふるが、この家屋敷だけだけで買ひ取たのと金次郎は次第に詞を改めぬ」

「是は存外のお詞、これは存外のお尋ね、すると旦那はこの買買に疑はしい處があると仰せでござりまするか」

豊作は膝頭を氣にしながらから前にある膳を掻い遣て、する／＼と前み出ぬ
「それが分らぬ故尋ぬるのぢや、お前を疑ふのでは無い、私の役義を盡すのぢやよ」

豊作が不平らしく口を歪めて問ふほど、金次郎は笑顔なりき、炯々せる目に豊作を睨みながら、頬の上には溢るゝ如き笑を見せき

(八)

「何ともござりませ、音藏と私との相對、それにはお代官鞆伺様もお立合でござりまする」

お代官お立合の一語には、豊作力を籠めて云ひき、金次郎は櫻町四千石の興隆恢復の命を蒙りて出張したる小田原公役人なれど、代官鞆伺權太夫も亦小田原公より派遣せられたる役人なり、金次郎は新しき鋤鋏をもて荒蕪を拓

くべく、美しき心をもて遊惰の民を導き行くべく、主として土地と民心とを改善すべき任務にわれど、領内の政治は總て權太夫の手にあるを奈んせん、金次郎の主意に反きたる事も權太夫は恣に爲し遂ぐべく、金次郎の仕掛けたる事も、權太夫の命としては兎も角破壊すべき事を得るなり、故に岸右衛門一派の者は、兎もすると權太夫の權勢を笠に着て、金次郎の命令を奉ぜぬことあり、甚しきは金次郎仕法に對ひて、恐るべき妨害を試むることあり、金次郎は夫等の不法の迫害に遭ふことに齒を切りて忍耐するを常としき、涙を呑みて手を控ゆるを例としき、彼は權太夫と争ふことを爲さずして、權太夫が徳に化すべき日を待ちぬ、自個誠實の心よく權太夫を善化すべき日を待ちぬ、同時に金次郎は近き將來にその時期の來るを信じき

然も今音藏の不幸を救はんとして、鬼の頭に鐵槌を下さんとする時、圖りなくも其の背後には權太夫の眼の輝くを認めき、音藏を救はんとするには、勢ひ豊作の非を鳴らして、その手より家屋敷を奪ひ返さざるべからず、豊作の非を鳴らすは權太夫の非を鳴らすなり、豊作の手の物を奪ふは、權太夫の

手の物を奪ふなり、權太夫よく金次郎の勢ひに屈すべきか、勝ち誇れる非義非道、よく正義正論の前に叩頭すべきか

金次郎は思はずも眼を睨りぬ、されど今となつては詮も無し、假し敵の背後に何物が現はれんとも、一たん脱きかけし刃をその儘には納むべからず、一たん救んとしたる音藏を再び千仞の鋒へは突き落されじ、もし此處に心を屈して、權太夫の前に手を突くことあらば、金次郎の名は地に落ちん、金次郎の事業は根本より碎けん

「鶴岡殿お立ち合ひなされるとも、私は私で尋ぬる。お前は音藏に金を貸して、その抵當に物を奪はるは、天下の大法でござります」

「ぢやに由つてそれを悪いと申すでは無い、只幾許の貸金の爲めに、田地畑家屋敷までを奪たかと尋ぬるのぢや」

「金の高は幾許でござりませうとも、お代官のお取り捌きに不法の事はあるまいと存じます」

「さらば其金を私が返す、金を返せば云ふ處はない筈ぢや」
「折角ながら音藏への貸金を、あなたのお手から返して戴く法はござりませぬ」

「由て私からは返さぬ、音藏手から元利揃へて綺麗に返さする、それに鶴岡殿故障のゐる筈なと思ふが、お前はまだ不承知を云ひ張るかの」

「一應お代官様へ相談、その上で確とした御返答を申し上げます」と豊作は逃腰なり

「鶴岡殿は岸右衛門新宅にお在ぢや、一走りに相談を付けて参れ」

流石の豊作も金次郎のこの詞を背くこと能はざりき、不性無性に起ち上りて

「それでは一寸お待ちなされませ、お代官様思召し、篤と聞き合せて参ります」

音藏父子が雨に濡れて、悄然と起ち居れる前を横り、豊作は番傘を斜めにさして、百姓には相應せぬ高足履踏踏たう

九

「音藏、遠慮はない、これへ入れ」

金次郎は上り栞に腰掛けぬ、日は暮れんとして暮れず、物淋しき臺所に鼠の走る音高く聞こえて、陰氣家内に充滿ちき

「御心切は有難うござります、然しお代官様に睨まれる事はござりませぬか、お代官様に睨まれては、私共立つ瀬がござりませぬ」と音藏は我家の軒場に小さうなりき

「悪事さへ致さねば上役人を恐れるには及ばぬ、吉太郎も寒からう、遠慮は入らぬ、これへ入れ」

「吉よ、何うしやうな」

「私は家に居たいわいの」

「これへ参れ」と金次郎は吉太郎の手を取るばかりに優しく「不憫や、手も足も凍えてあらうに」

「それではお詞に甘へます」と音藏は懐しかるべき我家の中に一足踏み入
れて、恐しげに家の中を見廻しき、金次郎は今まで豊作が酒の燭取り居たる
陶器火鉢の粗末なるを上り櫃へ引き寄せて、火箸の尖に烈々と赤き火を掻き
起し

四〇

「まづこれに中れ、斯う寒うては火鉢に越した馳走も無い」

音藏父子はその火鉢を左右より取り圍みて、今にも凍えぬべき頬の肉を温
め、手の甲をあふりて、思ひ掛けぬ真心に感じ泣く、金次郎は懐中より幾枚
かの黄金を取り出で

「こゝに二十兩ある、豊作の負債はこれだけぢやの」

音藏はまづくと金次郎の顔を見詰むのみ、その黄金を手になんとはせ
ざるなりき

「乃公から返すと云ふたりや、何かに難癖の付けたい和郎ぢや、四の五の文
句云ひ居らう、これを汝の手から返せ」

「滅相も無い、何として左様の事、あなた様お手からお金頂戴致しては、天

道の御罰恐しうござります、これは平に御恕しござりませ」

「要らぬ遠慮ぢや、この金子私が恵ひでない、皆お殿様から下さるのぢや、

そなた正直を御賞美あつて、神様から下さるのぢや」

「いえ」と音藏は手を掉て「それでは心が澄みませぬ、私の借財は私の

手で返すのが大法でござります」

「何に付けても堅い事の」と金次郎は笑ひながら「金で買はれぬは正直を旨

とする良い百姓ぢや、いかに新田を拓いても、それを耕作する百姓の心が邪

では、良い米の實る時節が無い、村々の仕法は田地の草を刈るよりも、まづ

百姓の心の醜草を刈るにある、私はそれを思ふに由て今度加賀越後兩國から

百姓を呼び寄せ、良い苗よりも良い人間を植ゑ付けやうと考へて居る、遠方

から百姓を呼ぶには、それに相當する路用も要る、それを住はせる家屋敷も

要る、その雑用が少しでない、況してお前は土地の人ぢや、濁り切た漚の中

を只一筋流るゝ清い水ぢや、二十兩や三十兩で足を止めることが能きりや、

こんな廉い物はない、金銭は實に尊い、けれど人間唯一の寶では無い、正直

に稼げば何日でも獲られる、然しお前のやうな眞直な百姓は、今云うて今得られる者でない、村の實とはお前の事ぢや、兎も角も取て置かつしやれ、故もなく金を受けるが、お前の心に澄まぬとあれば、都合の爲さるまで貸して進ぜる」

音藏は遂に聲を擧げて泣き出しぬ、父が聲を擧げて泣くに、何の故とは知らず吉太郎も又聲を限りに泣き入りぬ、音藏は金次郎に對ひて、その心切の有難きを断らんとすれど、餘りの嬉しさに咽喉引き締りて、思ふやうに聲は出でぬなりき、口許まで感謝の詞は出でながら、その百分の一千分の一をも聲に出す工夫はなかりき、彼は二十兩の黄金を面に充て、「おう〜」と泣き入りぬ、嬉しさ究まるは猶悲しさ究まるが如く、聲よりは涙先ちて、きと結びたる唇のわな〜と慄ふものなり

「吉よ、吉よ、二宮の旦那様がこのお金を貸して下さるとよ、吉よ、吉よ、二宮の旦那様が、私やそなたの難義をお救ひなされて下さるとよ、吉よ、吉よ、二宮の旦那様が……」

「音藏」と金次郎は笑ひながら「お前は當家に住むがそれほどに嬉しいか」

「旦那様、此處は御先祖の建て、下された大事の家でござります」

「夫ならもう少し家を大切にしてい遣らぬかよ、お前が家を粗末にするので、家の方から暇を出さうとするのぢやよ」

「へえ」と音藏は涙から顔を放して「久しう普請も致しませぬ、御覽の通り、壁の落ちた處もござります、けれど其處までは手が廻り難ねますのでな」

「それは止むを得ぬ、然し臺所の窓を反古紙で張て居るではないか」

「吉の双紙の古いのでござります」

「そんな物で張るに由つて、只さへ暗い臺所がいよ〜陰氣になつて來るのぢや、陰氣な處には貧乏神が屯をする、書院や奥座敷は反古で張て差し支へ無いが、流し元の窓だけは白い紙を張らつしやれ」

「是から氣を付けるでござります」

金次郎が反古窓の教訓は是なりき、音藏の家は臺所の窓を白き紙に張り替へて後次第に繁昌しきといふ

金次郎が反古窓の教訓終りて、音藏の瘦せたる頬に頼母しげの微笑見えた
時、豊作は足早に歸り來りぬ、彼はまづ音藏を見ぬ、次に吉太郎を見ぬ、
次に金次郎が大磐石の如く沈着きて、火鉢に中り居れるを見ぬ、彼の眼は明
星を懸けたるが如く輝き、彼の口許には冷たき輕侮の笑漏れて見えぬ

「豊作、甚う早かつた、鶴飼殿は何んと仰せられた」

金次郎は詞徐かに問ひぬ、されど豊作は答へもなく以前の坐に無手と坐る

「恰ど音藏も歸つて居る、聞けば負債は元金が五兩、利息が十五兩、併せて

二十兩と申すことぞや、相違あるまい」

「只今お代官お越しなされます、私は只お代官任せ、お代官のお捌き次第、

何れともお詞に従ひまする」

代官入來と聞きて、音藏父子は顔の色を變へぬ、久しぶりに瘦せ窶れたる
眼の縁を彩りたる笑顔は忽ち跡も無く消え失せぬ、吉太郎は父の手頸を沈と

握りて

「父様、お代官様お入來と申す氣にござりまする」

「さうの様ぞや、お叱りはあるまいかの」と恐しげに金次郎を振り返る

「恐るゝ事は無い、借りた物は返せば済む、いかに代官の勢でも、借りた物

を返すなど云はれる筈は無い、高が金で済むことぞや、心配するには及ばぬ、

しつかりと私を力にして居やつしやい」

折柄外の垣の下に、高木履の石を噛む音ころりと響きぬ、二三人の話聲次

第に近く聞こえ來る

「や、お代官様お越しぞや」

豊作はひらりと下へ飛び降りて、入口に土下座せぬばかりの氣色、金次郎

を控へ綱に爲ながら、音藏父子は慄ひ戰きて、これも庭の片隅に一縮みとな

りて控へぬ

真先に酒の香り、次には岸右衛門、其次には鶴飼權太夫、後には下役の赤

松嘉兵衛、持田伊助の二人、鹿爪らしく従ひて入り來る

「お役目御苦勞に存じまする」

「何かは知らぬが、貸金の事で争ひを致すさうぞや」と權太夫は金次郎に目も呉れず、「音藏、それへ出ませ」

音藏は蒼褪めたる顔を掻げぬ、今日まで幾度も代官の辛き裁判に泣きたる身は、今又如何なる難題を云ひ掛けらるゝかと、あはれ胸を冷すなりき

「今日申し付け置いたこと、そなたまだ用ひぬさうぞや」

「左様ではござりませぬ、なれど二宮の旦那様御心切に仰せ下されますので……」

「何ぞや、そなた何を云ふ」と權太夫は一言に云ひ消して「二宮が何うした、二宮が何とした」

「いや」と金次郎は重い調子、同時にきつと頭を掻げぬ「音藏に御用あらば、拙者代つてお聞き申す、何なりとも仰せられ」

「おう、二宮それにお在でか、餘りお身代が小さいゆゑ、遂にお見外れ申したよ、は、」と高笑ひ、其後から眞面目になつて「御邊は何か、拙者の申し

付け置いたことを、お妨げなさるのか」

「左様な事は無い、音藏を不憫に思つて、只今慰め遣はす處ぞや」

「不憫とは——はて不憫とは」

「借りた金返すといふ、それを豊作が受けぬ氣ぞや、世に是ほど憐れなこと無いでないかの」

「豊作」と權太夫は見返つて「お身何故金を受け取らぬ」

「是は迷惑、さて是は迷惑に心得まする、返すも返さぬも音藏に一文の貯へない事は、お代官様も先刻御覽あらせられた通りではござりませぬか、日限

までに金子の調達調さぬ時は、家屋敷田地畑畑悉皆あなただ様へ差し出し、毛頭御損耗相掛けまじとの文言、證文通りに取り計ふが、私の不調法でござり

まするか喃」

「それならば仔細は無い、二宮今聞く通りぞや」と權太夫は得意なりき

「處が相違、音藏は借りた金を返すといふ、貸借は天下の大法、借りた物を返すに四の五のある筈無いでないか」

「勿論の事」と權太夫は熟柿臭き息の下から「音藏、そなた金があるか」
「聊か所持してござります、その金子返却致せば、豊作殿御勘辨下さるでござりませうな」

「金を返せば仔細無い、然し他の金は相成らぬぞ」と權太夫は額に彫みたる
皺の間より、きと金次郎を睨みたりき、彼は音藏に一兩の用意だもなき事を
知りぬ、もし金次郎から其金子を立て換ゆべしなど云は、此處置の難溢に
爲り行くべきを察して、早くも鋭く釘を刺しぬ

「それは勿論ぢや」と意外にも金次郎が口を挿みて「双方の貸借、他より口
を挿む筈はない」

「音藏、そなた金があるか」

豊作の口の側には絶えず輕侮の色満ちぬ、音藏は背後に金次郎を控へなが
ら、一言返答する毎に其氣色を窺ふ如くして

「私にも金はある」

「元利積つて二十兩ぢや、今こゝで受け取らうの」

「その二十兩返して了へば、この家屋敷から田地畑、悉な返して下さりま
する喃」

「念には及ばぬ、お代官様を在らせられる、二宮様も在らせられる」

「お代官様、きと爾うでござりまするな」

「馬鹿念を押すぢやのう」と權太夫は愈よ笑ひて、「武士に二言はない、然し
そなたに金があるか」

「澤山はござりませぬ、二十兩だけござります」

「有らば出せ」と豊作は威丈高になつて「口ばかりでは爲らぬぞ、今の間が
缺けては爲らぬぞ、二十兩の中が一文缺けても、この相談は破れて了ふぞ」

「それは承知でござります」と音藏は彼の二十兩をざらりと出す、傘の餘滴
の玉を作す間に、井出の山吹燦然と光りを放ちて、音藏は得意の色、豊作は
惘れ顔、よもやと卑みたる空井戸に、清き水の湧き出でしを見たる如き權太
夫は、徒に頬を膨らせて、其處に立てる三人の下役と、岸右衛門とを見返り
たり

「真鍮小判ではござりませぬ、正真正銘の黄金でござります、改めて受け取
て下さりませ」

豊作は之を斥ける詞も無く、これに不承知を云ふ詞も無く、この正さを故
障する手術も無く、無言の中に二十兩を取り納めぬ

「もう云分はござりませぬ喃、この家は私の家でござりまする喃」

「そんな事此方や知らぬ、そんな事此方や聞らぬ、金さへ取れば用は無いの
ぢや」と白い眼に睨み付けて「然し今日の事忘れるな、この鼻様にようも耻
辱を興かせた喃」

「岸右衛門も居るぞよ、お代官様も在らせられるぞよ、外にお役人衆もお在
なさるぞよ」と岸右衛門は口を歪めて「篤と見て置く、そなた仕方を篤と見
て置く」

(一一)

権太夫は真先かけて外へ出でぬ、雨は稍々小歇となりて、真垣の蔭に薫る

白菊の一もと、真の人の苦節を似すが如く積郁たりき

續いて赤松、持田、大篠の三人、更に續いて岸右衛門豊作挨拶も無く権太
夫の後を逐はんとしぬ、金次郎は口を開きて

「豊作、待たう、岸右衛門も待たう」

二人は一たん跨ぎたる敷居を後に戻りて、金次郎を沈と見入り

「何か御用でござりまするか」

「用があればこそ呼ぶ、お身達は音藏見るやうな優しい百姓を捉へて、折々
膏を絞るといふ、酒と博奕とを命とする無頼漢が、村の基礎と云ふ正直な百
姓を窘めるは、恰ど蜜蜂の巢の間へ、恐しい熊蜂が混れ込んで、朝は早くか
ら夜は遅くまで、營々と稼ぐ蜂の子を逐ひ出すやうなものぢや、蜜のある間
は遊んでも暮らせるが、食物の盡きた時、熊蜂ばかりでは巢が持たれぬ、此
からはちと警め」

「へえ、二宮様は私共を熊蜂ぢやとお云ひなされますか喃」

「お身達の様な悪黨が蔓るゆゑ、櫻町御領内が年々と衰へ行くのぢや、音藏

のやうな良い百姓ばかりあれば、お身達の様な人間はちとも要らぬ、お身達は金の光りばかりを見て、田地畑が日ごと月ごとに荒れて行くを見る目が無い」

「それを善うなさるがあなたのお役目ではござりませぬか、あなた此櫻町へお越しなされてから何年になりますか、成るほど新田の二三ヶ所はお拓きなされた、今にも餓えて死なうとする貧乏人に、少しばかりは金も恵んでお遣りなされた、けれどあなた様お拓きなされた丈の田地は、一方で荒れて行くでござりまするぞ、一尺の反物は赤兒の衣服を作るにも足りませぬ、夫をおなたは大人の衣服にもしやうと為されます、櫻町の領内には第一は人が足らぬ、人が足らぬゆゑ耕作をせぬ、耕作に手が廻らぬゆゑ荒地が能きる、これは云はいつでも知れたこととござります、村を立派にしやうと思ふなら、まづ人間からお増やしなされませ、それも北國あたりの食詰漢は役に立ちませぬ、倔強な働き人をお呼び寄せなされませ、何の阿呆らしうも無い、十一萬石のお大名さへ年々入費の入損をして、青息太息をお吐きなされたこの村が、百

姓上りの小役人様お手で、仕法の付きさうな筈は無い、まこと仕法をお付けなさるお心なら、金子の一萬兩も持てござりませ、雨の漏る陣屋の座敷で、冷飯を掻き込んでござる御自分では、お氣の毒ながら後が遠うござりませうぞや」

「お身達は金より尊い物ないやうに云ふ、それが間違ひ、金よりは米ぢや、米よりは誠ぢや、誠さへあれば繁昌は必らず来る、譬へば蟻を集めるも同じぢや、何十萬疋捕て来ても、甘い物が無ければ直ぐ散亂する、けれども甘い物を置いて見さつしやい、どれほど追うても忽ち集る、金に集るのは博奕か、遊び人で、誠の周圍に集るのは正直な眞の百姓ぢや、お前達も好い加減に金の執着から離れて、誠のある一人前の人間にならつしやい、何日までも髪のもが黒うばかりはないに、何日までも柳の下に鱈は居ぬに、改心するなら今の間ぢや」

金次郎は機會の用ゆべきあることに、必ず道を説いて少しにても悪人の心を善き道に誘はんと力むるを例としき、金次郎が始めて櫻町へ來りし時は、

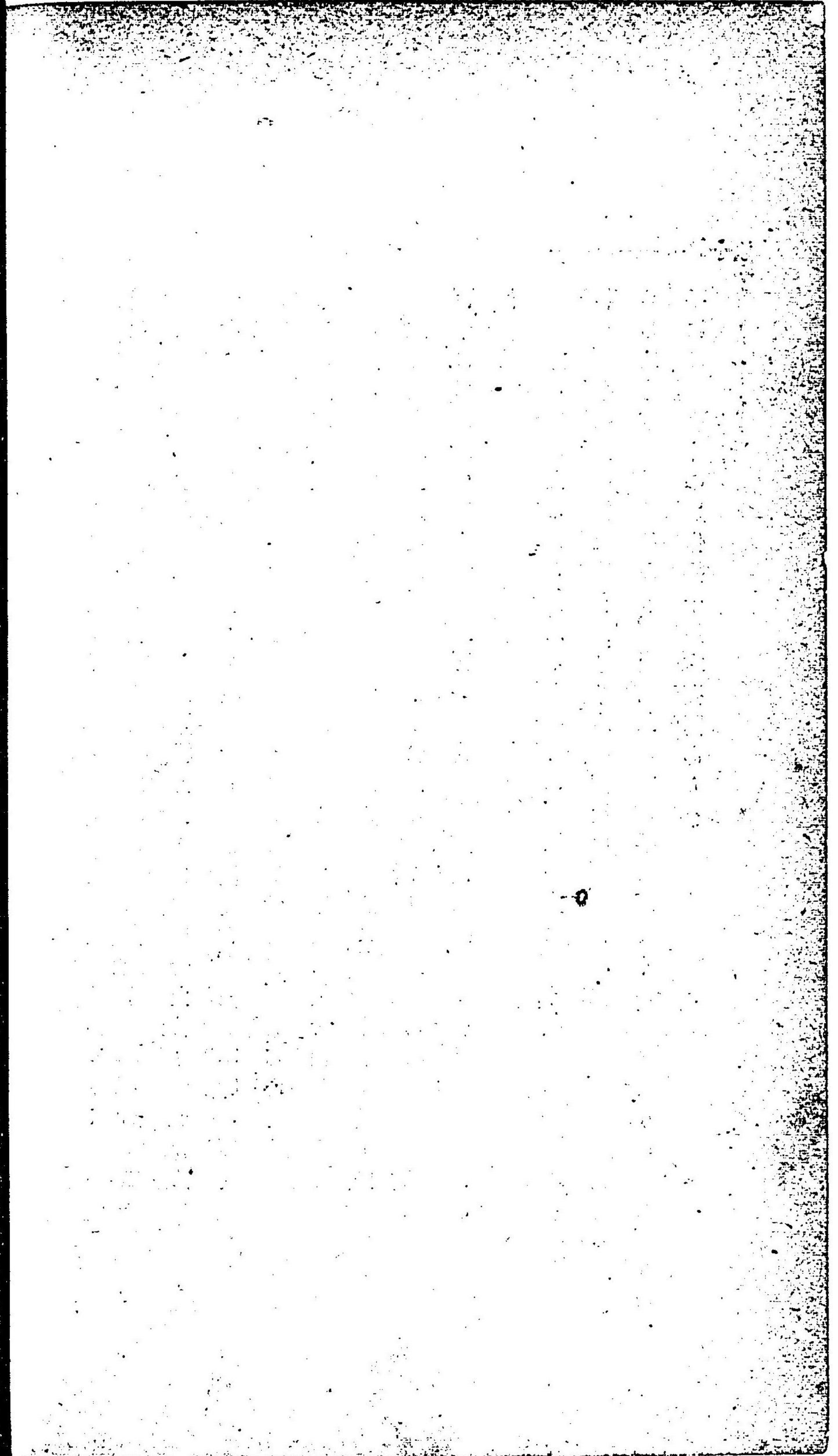
領内の多くが豊作勘十岸右衛門如き遊惰強慾の百姓町人にて充たされき、風俗は亂れ、田畑は荒れ、村は疲れ、町は衰へ、人として業に勉むる者なく、人として信義を守る者なく、村々には悪水漲り、字々には悪風染みて、殆んど手を着くべき處もなかりき、もし金次郎が普通の者ならましかば、此有様を一目見て、忽ち故郷に逃げ歸るべけれど、彼の大決心は身をもてこの滔々たる濁水の中に投じぬ、一滴の清水はよく枯死せんとする樹々を活す、金次郎が滿腔の熱誠は、この村里を新たにせでは止むまじとの勇氣を生みぬ、彼はこの土地の恢復興隆を見るにわらず、再び故郷の土は踏むまじと覺悟しぬ、彼の第一の着手は己を研きて人の鑑鑑とならんとするにありき、人々が家の業に惰り居れるを戒むるにもわらず、人々が日の高くさし登る窓の下に、いざななく睡りを貪るを覺まさんとするにもわらず、只自個一日の勤勉として、夜は遅く、朝は早く、村々を巡視するを廢せざりき

さるを最初の間は一人として知る者なかりき、その身が眠りを貪れる間に、その身の先祖が草分したる土地の衰頽を興すべき天使が、東西南北し居れり

とも知る者なかりき、されど小さき鐘も絶えず鳴りを續くる時は、何日か人の耳に入る習ひ、金次郎が夜もしくは未明の間の巡視も、一人知り二人知り、遂には領内の者みな知りて、お殿様お目鑑に協はせた仕法のお役人さへ、夜の中にお巡りなさる、我々が朝寐をしては濟まぬ、夫婦喧嘩の聲を聞かれては爲らぬ、下女下男を無慈悲に叱り付けては爲らぬ、皆な心せよ、二宮様お草履の痕が見えぬ中に、早く起きよ、起きて家業に精を出せよ」と心あるは皆な戒め合ひて、二年三年経つか経たぬかの間に、多くの實效を修め得き

然し金次郎の巡視に夢を覺まされたる人々は、到底何時までも朝寐すべき百姓にてはわらざりき、到底いつまでも遊惰に果つるべき者にてはわらざりき

一方に覺めたる人を得たる金次郎は、又一方に長く覺むべからざる人をも得つ、金次郎の徳に靡きたる草木の間には、又金次郎の苦辛して蒔く種を暴らさんとする鴉も住みき、金次郎の右の手には多くの音藏父子ありて、左の手には又多くの豊作勘十岸右衛門ありき



一心なれ

米一升は即ち六萬四千八百粒あり、而して一白の玄米を精ぐるには、

之を搗く杵の數、即ち一千三四百なり、杵の頭、いづれの米に當るとい

ふことを知らざれど、右の杵數ほど搗けば、いつし白米とはなるなり

これその搗く人の一心なればなり。

第二章

(一)

三幣彈正は小田原公より付けられたる金次郎の相談相手なり、横山周平は宇津家より派遣せられたる金次郎の下役なり

彈正は才餘りありて徳これに伸はざりき、周平は徳足りて才足らざりき、金次郎は才士の彈正よりも不才士の周平に事を問ふを例としき、彈正は如何なる大難に處しても、直ちに應急の策を樹つれど、その計畫に速算あること多かりき、周平はいかなる小事にも、多くの熟考を費せど、一たん決りたる事は大磐石の如に動かざりき、金次郎の性質として、周平を重く用ゆるは其處なり、然も彈正は快く思はざりき

「先生この仕法を何うなさせらる、」
彈正は金次郎を先生と呼ぶなりき、陣屋の掃除は一通り行き渡りて、今は壁に生うる草もなく、軒を漏る露も無く、時は春の半となりて、覚れたる庭

に鶯の鳴く音を聞きぬ、砥石に苔青く、石燈籠に雨蛙飛びつも、櫻は今年の
花を付けぬ、金次郎はその身の居間とせる八畳の間に、新らしく、壁を塗ら
せ居たるなりき

「十年とお約束申した日限も、足掛四年を空に過して今年は五年目ぢや、然
し今までは瀬踏み、是からいよいよ激しい流れを渡るのぢや」

「先生の思召は金銀の力に據らずして、一かどの實功を擧げやうと爲させら
れる、それが巧く成させうかな」

「心次第で必然能くる」

「は」と彈正は眼を白くして、きつと金次郎を睨みたるが、直にそれを他
へ轉して、「口では能きても、實際に能きいでは、要りが何の益にも立たぬ、
日頃先生お口ばかりを聞いて、耳に肝脈が中るやうぢや、今日はお口ばかり
でなく、その眞實の處拜聴したいものでござるな、日光御山の結構も沙汰を
聞くばかりでは心が往かぬ、松島鹽竈の好い景色も、書で見ればかりでは堪
能もならぬ、廣い日の本に只一つありて二つない好い仕法も、聲を聞くばか

りでは納得が能き難ぬるぢや、それで今日は横山姓を煽動して、先生の極眞
極隨といふ處を聞かうとする、拙者も横山も詮ずる處は先生腹中ぢや、いか
な秘密を語らせられうとも、口外する事は致さぬ、只我々この心に安堵の光
り投げて呉れ召せ」

横山周平は彈正の云ふ言が、必ずしも我志にてはあるまじき様に振り向き
たれど、例の柔順しき口は容易うも開かれず、彈正は又詞を繼ぐ、金次郎は
一言の答へも無し

「世には乗り掛けた舟といふ事がある。物の三五里も舳ぎ出いたら、彼岸の
手に取る如く見ゆらんと思案した當が外れて、行けども、白い波青い雲が
幾百里も列なるばかり、山の影一つ見ることの協はぬ場合、舳ぎ戻るは他に
も耻しく、男の意地と云ふも立たず、精を限り船を取て、無用の力を注ぐ中
には、限りある根氣も盡きて、海の中央に立ち往生する破目ともなるぢや、
それも乗り掛けた船頭一人の迷惑で事が濟めば、世の胡盧を買ふだけで落着
も致す氣、なれど同行同船の水夫までを、同じ淵に沈めるのは罪が重い、第

一はその者の迷惑災難一通りの事でも無い、申さば先生は船頭、拙者共は水夫他の頭に立つ者は、下々に迷惑難義掛けぬのを専とする、先生は乗り掛けた船を何うなさる御思案ぞや、まさか我等を抱いて帆柱の折れるまで漂泊なさるお心でもござるまらぬ」

次の間には一子彌太郎が乳母を捉へて、ひつがり難題云ふ聲聞こえぬ、金次郎は尙無言なりき、周平は苦り切て控へぬ。

拙者思ふ仔細あるに由つて、今日は齒に衣着せず申す、乗り掛けた船も追風悪いと見極め付けば引き返す、それでも先生胸中に、確とした成算でもござるか、無言の文々の御挨拶では閉口、御返答の模様によつては、考へる所もござる」

「三幣公はまだ我等深意を御斟酌下さらぬぞやの」と金次郎は口を開く

「先生御深意とは」と彈正は身を進めぬ

「兼々も申す通りぞや、櫻町四千石回復の仕法一身に引き受けて、故郷を出發致す時、我等存慮の次第具に申した、早やお忘れか」

「一心の誠を以て、如何な難義困窮をも切り抜けると 彼のお諭しでござるか喃」

「我等深意は、殿様より仕法の金子お下げ渡しにならうとした、夫を御辭退申し上げ、多年の間蟻が塔を積むやうに貯へた家財諸道具一切を賣代して、當地へ参つた一事でも知れる筈ぞや、我等彼岸の見えぬ海の中に漂ひ流る、事はせぬ、當地恢復の見込立つたればこそ引き受けた、只その時の至らぬばかりぞや」

「さ、時ぞや、先生の所謂時それが何日到来でござらうな」

「千里の路を一飛びにする者は無い、百里の海上を一艀で漕ぐ者は無い、小を積で大とする、千里の道も一歩から始まる、四千石の荒地を拓くにも、まづ一艀よりせねばならぬ」

「随分お氣が長いな」

「十年の間と始めからお約束申してある」

「十年は夢の間ぞや、夢の間にこの仕法首尾全う爲りませするかな」

「私は十年を夢にはせぬ、一日半日も夢の間には過ぎぬ、一畝から始めても半月か一月には一段歩の水田が拓かるゝ、一段歩の收穫が内輪に見積つて一石は必然ある、その内の五斗を耕作の用に充て、残る五斗を以て來る歳の入費に充てる、すれば始の一畝が一年の中には一町歩にも二町歩にもなる、一年に二町歩を拓いても十年には二十町歩、その二十町歩になるまでに、年々歳々利潤がある、巧みに利潤を應用すれば外に仕事の手も伸びる、日の本は世界の土國と云ふが、それでも最初から田地が拓けて居たでは無い、國の始めに天降らせた神々が、何千萬兩をお手に爲されたのでない以上、私の仕法も同じことぢや、私は天地開闢の道を實行して、櫻町四千石を救うて見る、貴公も殿様お目鑑を以て我等副役に付けられたのぢや、仕法の緒を得たばかりの今、左様な弱いことを云はれるとは案外ぢや、一心の誠さへ通ずれば、自然に道はつく、少し氣を長う持たせられ」

「その天地開闢の御議論も、只今の處ちと當になりませぬでな」

彈正は尙屈したる様も無かりき、金次郎が苦心經營せる恢復の仕法も、百

姓町人には不平あり、代官役人には反對あり、然も股肱と頼める三幣彈正すら、豆殻をもて豆を煮んとする様を見せぬ、されど金次郎は驚かざりき、金次郎は落膽せざりき、彼は四面楚歌の裡に立ちて、徐にその企畫を行ふだけの餘裕ありき

二二

この物語の中、さつと間の襖を開けて、圓く鳩の如き目を睜りつゝ、色白く愛らしき顔を出せしは彌太郎なり、彼は今年五歳の春を迎へて、圓々と善く肥え、太りぬ、心は父に似て素直なれど、意地強く、負じ魂他に優れて、一旦云ひ出せし事は容易に後へ退かんとせぬ腕白兒なり、座敷の突當りを二三人の左官が、鍔を取りて壁を塗り居れるを見

「お父様、何故彼處を塞ぐのぢや」とさも不平に堪へぬ如く云ふ

「何故として……塞ぐのでは無い、彼は壁といふを塗る、人間は明け放しで生きられるものでない、人の家には壁が無うてはならぬ」

「私は此處を真直に通らうよ」

「男の兒はその様に無理を云ふものぢやない」と金次郎は詞優しく「それに三幣殿も在せられる、無理を云ふと叔父共が笑はうぞ」

「いや〜」と彌太郎は頭を掉て、「私は通る 私に彼處が通りたい」

「もし〜」と乳母は背後から詞を掛け「あなたの様に御無理を被仰るものではござりませぬ、此方に良い玩弄物がござります」

「玩弄物は要らぬ」と彌太郎は頭を掉て「彼處を通るのぢや」

「そんな事を被仰ると、鬼一口が参りますぞ、鬼一口を恐しう思召しはござりませぬか」

「鬼が何ぢや、鬼よりは乃公が強いわ」

「強いお方は左様なことを被仰るものぢやござりませぬ」

「否ぢや〜、彼處を通る、坊はあの壁を通ります」

乳母は様々に詞を盡したれど、彌太郎は聴き入る、様も無し、地團太を踏み、襖を叩きて「壁を通る〜」と大音に喚き立てぬ、彈正は苦り切る、周

平は眉を顰むる、され 金次郎は例の如く莞爾して

「彌太郎には困るぞの」

「乳母が坊様に好い物を差し上げます、此方へ來らせられませ」

「何にも要らぬ、好い物欲しうない、彼の壁を通るのぢや」

「これほど申すを」と乳母は眼の稜を鋭うして「お聞き入れをござりませぬか」

「お主其方へ行け、乳母は嫌ひぢや」

「え、も」と乳母は彌太郎が襖に捉りて動かじとするを、強て抱き縮めて

次の間に伴ひ行かんとする

「否ぢや〜、乃公は否ぢや」

「諾し〜」と金次郎は頷き「乳母捨て、置け、斯う云ひ出しては聞き入れる彌太郎でない、父が彼の壁を通らせて遣る」

「通らせて下さりませ」

「ぢやが彼の様に壁がある、壁があつては通行が能き難い、暫く待つしやい」と彌太郎を和め置きて「これよ、其處の左官よ、氣の毒ぢやが壁を毀ちて呉

れまいか」

左官の棟梁は驚きて此方を振り返る

「今塗たばかりの壁を毀つのでござりまするか」

「彌太郎が通るだけの處ぢや、お前達の骨折を無にしてはならぬが、壁は塗れば以前の通りになる、けれど子供の心に龜裂が入ると、一生普請の道がなくなる、御苦勞ぢやがお頼みする」

左官は不平らしく大工を呼び來りて、今塗り終りたる新壁の一部を取り毀ちぬ、彈正も周平も、金次郎が彌太郎に對する嫉方の甘さに驚きぬ、是ほどの無理腕白を制し得ずして、今塗り上げたる壁を毀たんとする事、餘りに事に疎き仕方なり、子供の心は春の野に颯々る紙齋の絲の如く、此方に強き網を控ゆるにあらざば、何處までも高く上り行きて、遂に樹末に破らるゝか、風のまにまに吹き晒らされて、遠き海山に骨を残すか、良き終局は見まじきに、二宮金次郎——微賤より身を起して、小田原公御目鑑に協ひ、天下直參の御旗本たる宇津殿御身上を仕法せんとするほどの二宮金次郎が、その子供

の嫉方に宜きを得ぬこと此の如し、此人の眞の價は是にて知らる、假し多少の智恵才覺はありとも、假し少しの學問は心得るとも、百姓の魂性は百姓、蛙の兒は蛙、金次郎はその實質に於て同じ色せる眞鍮次郎なる事疑ひ無し、斯くして彌太郎次第に増長し、塗り替りたる壁の上を、強ても通らんゝと云ひ張らば、幾度も塗りつ、毀ちつ、遂には左官大工の怒りを買ひて、この普請成就の時なく終るならん、一事は以て萬事を推す、金次郎の仕法と云ふも、この筆法よりする姑息手段なるかも知れじ、頼もしからぬ仕方かな、前途覺束なき嫉かな

口には云はねど彈正は呆れたるやうにぞ見えし、されど金次郎は例の如くにこゝろ笑ひて、左官の手に壁の一部を毀ち終るを待ち

「さア通れ、これならば善く通らるゝ」

彌太郎は得意満面なりき、羽二重色せる白き頬に嬉しげなる笑を漾えて、蔦地に駈け抜けぬ、蔦地に駈け戻りぬ

「彌太郎々々」と金次郎は強き聲にて呼び止めぬ、二三度も同じ處を抜けた
潜りつせし彌太郎は始めて満足したる如く歩を止めて、父の前に突立ちぬ！
「それで心が済んだか」

彌太郎は頷く

「ま、此處へ坐れ」

彌太郎は云はるゝ儘に坐りぬ、金次郎の目許の笑は瞬く間に消え去りぬ、
儼然して

「もう好いか、もう通行せずとも好いか」

彌太郎は又頷く

「それなら壁を塗らするぞ、彼處は人の通行する處でないゆゑ、左官に吩咐
けて壁を塗るぞ、好いな」

彌太郎は頷くのみなりき、父の氣色の例ならぬにきよと／＼と目を睨るの

みなり

「二度と再び彼處を通るとは云ふまいな」

「もう云ひませぬ」

「きつとか」

彌太郎は更に頷く

「序に云うて置くが、人の通つても好い處は、斯うして開閉の能き障子襖
を樹て、置く、けれど通行する要の無い所、又通行して悪い處は、壁を作つ
て風を防ぎ、垣を繕つて往來を絶つ、これが人間の身に大切な道といふもの
ぢや、悪人は道でない處を通るゆゑ難義をする、善人はその道を一生懸命間
違はぬやう歩くゆゑ、人からも褒められる、今日は左官や大工が居てくれた
ので、お前の難義する處を、大工左官がしてくれ、もし大工左官が居て呉
れねば、お前が手づから壁を毀して通らねばならぬのぢや、この小さい手で
彼のやうな壁を毀つ、すると痛々しい怪我をする、怪我した處に紅い血が出
る、それは皆な無理をいふ御罰ぢや、それでも道の無い處を歩いて、面白け

ればまだしもぢやが、お前今彼處の壁の下潜り抜けた、面白くはあるまい、花や若葉の美しい道を通るやうに、面白いことは些ともあるまい、面白うなうて痛い目をして、お負に神様の御罰を受ける、是ほど阿呆らしいことは無い、今日に凝りて以來は道で無い處を通るといふては爲らぬぞ、口で云ふは無論の事、心に思ふことも成らぬぞ、よいか、分つたか」
彌太郎の小さ胸にも、金次郎の廣く大きく、更に深き心貫徹したるらしく、ほろ／＼と涙を溢し居たるが、

「父様もう爲ませぬ、もう道の無い處、歩かうと云ひませぬ」

「これから爲ると、父様が承知をせぬぞ」

彌太郎は遂に聲を擧げて泣き出しぬ

「父の云うたこと分つたか」

彌太郎は涙の中に頷きぬ

「分つたら彼方へ行け」

小さ胸に始めて道を聞きたる彌太郎は、腹の如き涙を拂ふ間も無く、盪然

と立ちて乳母の懐へ投げるが如く絶り寄りつ

金次郎の躰方は萬事がこの筆法なりき、普通ならば、彌太郎が壁のある處を通らんと云ふを、叱り付け云ひ懲りして、何處へか伴ひ行くが例なれど、金次郎は一たん子供の心に満足させて、然る後、徐に其不心得を諭すなりき、子供の志も奪ふべからず、一たん斯うと思ひ立ちたる事を、壓へ付け、叱り付け、強て思ひ止らせたるにては、その満足を得ざりし憾み、何時までも胸を去らず、やがて恐しき僻心となりて、遂に一生を誤ること無しと云ひ難し、金次郎は深く其の心理を知る、彼の教訓は壓へ付けて難しき道理を煩張らすするにあらずして、箸もて慈愛の甘さを哺むるなり、故にその詞善く消化れ、善く骨に徹して一生涯忘るゝ事なし

彌正はさるもあられねど、周平は深く金次郎の躰方に感じぬ、我兒のみにはあらず、部下の百姓町人を撫するも又この手心が肝要なり、配下の役人小吏を使ふにも又この緩急呼吸大切なり

彌太郎の去ると共に、周平は一膝進めぬ、彌正は憮然たり

(四)

「私は三幣姓御所論とも相違、先生御勘辨を願ふことござります」と周平は何時か眞面目なりき、聲は細けれど語調には力ありき。「私に勘辨爲とは」と金次郎は不審して「何事ぢやな」。「露骨に申します、腐れたる水には蟲が生き、腐れたる村には公事訴訟の絶間が無い、昨日から今日へ掛けて、都合六件の訴訟ござりました」。「眞に周平の云ふが如く、公事訴訟の續出せるは、その村、その土地の衰頹貧窮を意味するなり、その風、その俗の輕薄野卑を露出するなり、いかに良き肥料を興ふるとも、蟲の着きたる稻に十分の稈を見ることはなるまじく、いかに慈悲善根を施すとも、風俗の亂れたる土地人心を善所に導くは容易の事にてもあるまじ、金次郎は此事を聞くと共に、例の活々と光る眼に、一ひら雲の颯と掛るを認めぬ、一たび此地興隆の御委任を受けてより、夜は眠らず、晝は息を休めず、命に掛けて盡力し腐心する事が、今も仍村の人には届かぬか、今も仍些の感應無うて、斯る情無き有様を見るか、これ然しながら我の誠心の至らぬなり、我の精神の届かぬなり、當村の住民として禽獸の血を享けたるにてはあるまじきを、何とて好みて公事争ひを爲すべき、止むを得ぬ事情あればならん、四圍の風俗良民の心を蝕して、この無慘の有様を見るならん、我の望みの遂げ得られぬは、即て村人の幸運の未だ近く廻り來らぬなり」

金次郎は心に斯く思ひ續けながら、周平に對ひて、その訴訟の内容の如何なる事なるかを問ひ試みぬ、周平は待ち難ねたるやうに「鶴岡殿談話に聞きませす、其公事願ひ人は物井村二件、横田村三件、東沼村一件の割合と申す事、六件の中四件までは、土地境界の争ひ、一件は姦通、一件は横田村庄屋を相手取り、これは當陣屋へ願書差し出して居りますぢや」「鶴岡の手を經いでな」と金次郎は打ち案じ「横井村の庄屋に私曲どもあると云ふか」

「横田村百姓金兵衛と申す者、先生御存じもござりませう、親孝行の正直者

「巳に先生から御褒美のお目録も下されてある」

「泥の中の蓮とは彼ぢや、瓦の中の玉とは彼ぢや、彼には二三度も逢ひ、二三度も訪れて、老母に物を取らせたこともある、至極柔和の者らしう見たが、よく／＼の事あればこそ庄屋を相手取て訴へ出たのぢや、貴公訴訟の文面見られたか」

「文面一讀、當人にも對面、具に事情を聞き取てござるが、庄屋の私曲、怒すべき要は無い、篤と御詮議然るべく存ずる」

「どう云ふ事ぢや」と金次郎は膝を進めて「幸ひ三幣殿も居らるゝこゝでは非黑白を明かにして置かうでないか」

「要りが庄屋松右衛門、鶴飼殿御最良を楯にして、鬼の如な太い手を金兵衛の頭上に加へたのぢや、先生も知らせられう、金兵衛居宅の背後に八段歩ほどの大藪がある、彼の藪の筈を老母殊の外好むといふ」

「孝子に筈、面白い對照と存じて、先年三幣殿に物語つたこともある、その藪何うしたの」

「藪に沿うて芋畑が二三段——もそつとござらうか、五六段もござらうか」

「彼の芋畑松右衛門持ぢや、然し肥料が届かいで、幹も葉も太う瘦せて居る」

「處が松右衛門、去年の暮頃から、彼の大藪を自分領地と云ひ張り、自儘に細張した氣にござるぢや」

「言語同断、假にも庄屋とある者が、左様な理不盡、恕し難い事でござるの」

「常は羊の如に優和しい金兵衛も、松右衛門仕方に赫と怒り、屢次掛合に參る處、親の代に三兩の貸金あつて、多年の間に元利總計五十餘兩にもなる、その代に竹藪を取るのぢやと云ひ張る氣、由て止むを得ず代官所へ訴へ出た

れど、鶴飼殿は御存じの人物、松右衛門とは年來の關係もある、親のした借金はずが支拂ふ定法、只今となつて四の五の云ふは上を恐れぬ致し方、謹んで控へ居れとの捌き、長い物に巻かれては手足を動かすこともならぬ、母が

好物の筈今年から他の手に渡るかと思へば悲しく、二宮旦那様お袖に縫りま

すとの口上、いかにも憫れ至極に見ゆる、然も親金右衛門の代までは、村中に指折の身代、高が三兩ばかりの金、松右衛門から借りさうな筈は無いと、

さも口惜しげに申し張る、云ふ處偽言とは思はれぬ、何とお捌きおらせませうな」

(五)

「夫も松右衛門が悪うは無い、皆鶴飼殿悪いのぢや」と金次郎は吐息つく
「彼人當地代官の職にありながら、何とて先生御仕法の妨げを致すでござりませうな、衰残疲弊の極みにある當御領内に、春の風吹き渡り、春の水満ち漲り、至る處に花咲き鳥啼ふ泰平の象を見れば、その勳功は半まで代官の肩にも掛るを、先生御苦辛の御事業、半成らんとする傍より破壊して、頻りに徳を傷けんとする、彼は御領内を草原にして、悲風絶え間もなく吹き頻り、酸雨時を選ばず降りそゞ間に、亡國の歌謠ひ、獨體の如き身體で踊り樂む心とも見ゆる、斯う申しては如何なれど、天下大老職をも勤めさせらるゝ小田原公、何とて斯様な人物をお召し遣ひござりませうな、斯様な人物に四千石の代官、御委任おらせらるゝでござりませうな」

周平は慨然として云ひ出で、彼は學問あり、彼は見識あり、金次郎の徳に服して羊の如く温順に従へど、一たび事ある時は勇氣小き身體に満ちて、虎をも搏にすべき概ありき

「殿様は何事も御存じおらせられぬ、私はこの村を仕法する前に、まづ鶴飼殿を仕法せねばならぬ、荒地を拓き行く前に、まづ鶴飼殿お心を拓かねばならぬ、土地を興すは人の心を興すにある」と金次郎は沈着きたる聲にて云ひしが「然し鶴飼殿は私よりも地位が高い、もし鶴飼殿が私の部下に屬して居たら、もう少し早く善に導くことも能きるが、只これだけに不便を感じる、人間は妙な者で、自分より上の人、自分より上の仕事する分は何んとも無いが、自分より下の人、自分より上の仕事をするのを見ると、一種の嫉妬が起る者ぢや、鶴飼殿も小田原公御家人、何百人の御家中から選まれて、當地代官ともならせた方ぢや、悪心はあるまいが嫉妬がある、嫉妬があるから私の仕事の妨げをする、その妨げをして居る間は、自分の心が平かぢや、村人の身から云つても、下役同然の私の云ふことを聞くよりは、上役の鶴飼殿

詞に従ふが、後々の利益のやうに思はれる、これは人情さもあるべき事、私の第一の失錯は、小田原公からこの御委任を受ける時、身分だけを代官の上

に置かせられるやう、お願い申すを忘れた事ぢや」「それを今お願いなされては何うござりまするな、先生仕法に鶴飼姓妨げあつては、この仕法成る時がござりませぬぞ」と彈正は口を挟んで「只今の事情、先生から具に上申、お望みの次第御願ひなされたりや、殿様きとお採用ひござりませうぞ」

「いや」と金次郎は頭を振て「それは女のする事ぢや、是でも私は男ぢやよ」

彈正は一言の下に口を噤みぬ、周平は又乗り出る

「只今申し上げた金兵衛訴訟、黒白は明鏡に懸けずとも見え透いて居る、すぐお捌きござるか」

「暫く猶豫、私に考へる事がある」

「なれど其内に、庄屋松右衛門又理不盡の手を加へることござるまいか」

「双方黒白一目で知らるゝ、ぢやが鶴飼の斯くてある間は、黒い鷺が當領内をのさばり歩く、鷺は白いに極つてあると断じて、鶴飼が黒いと云ひ張れば據ない、黒いは黒い、白いは白いで通用の爲さるまで、この捌き待たねばならぬの」

「その時節何時参りませうな」

「もう長い事はない、鶴飼いかに威を張ても、小見川の水を逆に流すことは能きぬ、暫く待て、一つの頼みは鶴飼頻つて大酒をする」

「真に鶴飼殿不品行も、一は大酒の爲す業と知られまする」と周平は云ひながら不審して「先生は鶴飼殿御酒好を……大酒を致すものは得手卒中などに罹る、それを待たせませうか」

「は」と金次郎は思はず笑つて「いかにしても十年河清を待つ愚は學ばぬ」

「さらば鶴飼殿御酒を好ませらるゝを、一の頼みと仰せらるゝは喃」周平は幾度も念を押して問ひたれど、金次郎は只打ち笑ふのみにて答へざりき

(六)

夜は更けて新らしく塗りたる壁に、宛ら吹雪の中るが如く響くは、甲夜のほど盛りと見えし櫻の花の散り来るなり、金次郎は今机を放れぬ、時計は亥刻を櫛り打つ

ほの暗き行燈の下に坐りて、彌太郎の爲に手織絹の爽衣を縫ひ居たる妻の歌子は、良人の心の盡さんことを恐れて、煎花注ぐべく湯呑茶碗を取り上げぬ、とたんに

「お歌」と金次郎は莞爾ともせず「お前も仕法の手傳ひをせねばならぬ」

「何事でも致しまする、性來鋤鋤を手にしたことをござりませぬが、それでも一心の誠をもてすれば、荒地を拓くことも能きやうと心得ます」

「いや、そんな事ぢやない」

「お帳面のお手傳ひでござりまするか」

「爾うでも無し」

さらば、御領内巡檢、瓦の中の玉とも見る、孝子節婦を尋ねるでござりまするか

「いや爾うでもない、私はこの地へ來てから、血も肉も目に見えて減るほどに苦辛をして、一生懸命に土地の興復を盡つたが、まだ思ふことの十分一百分一も能きぬ、これは私の誠心が至らぬからでもあるが、一つは鶺鴒が仕法の邪魔を爲るにも由る」

「まことお側に見て居ても、齒痒い事がござります」

「いかな大木も伐れば倒れる、いかな木の根も掘れば除られる、然し自分より目上の役人を逐ひ斥ける法は無い、私はこれに當惑した」

「あなた何う遊ばすお心でござります」

「細みといふは是ぢや、お前の手でその邪魔物を除いて呉れるぢや」

「私の手で……鶺鴒様を……」

「私も様々考へたが、是はお前に限る、お前の手で鶺鴒の心を追ひ詰めて呉れるのぢやよ」

お歌は仍十分に良人の心を察し得ざりき、不審の眼を圓うして

「そのお詞、私には分り難ねます、私の甲斐無い手に、鶺鴒様のお心追ひ詰める——追ひ詰めること爲るでござりませうか」

「女の手も時には仕法の用に立つ、これはそなたに限つたことぢや」

「三幣様、横山様、歴々の御方存らせられるに、私如なるを名さしての仰せ、今更ながら心の才の足らぬを悔みまする」

金次郎は如何なる大事に處しても、其態度は泰然たり、其眼許には美しき笑見えぬ

「才も什麼も要らぬ、只口があれば好いのぢや、只手があれば事が足る、今も云ふ、鶺鴒は酒が好物ぢや」

「鶺鴒様御酒好きと、私の此手、此口と、何の關る處ござりまする」

「鶺鴒は朝寐をする、眼を覺すは已刻ぢや、そなた明日の朝酒肴調理して、鶺鴒の宿所へ尋ねて行くぢや、彼奴さつと驚からう」

「その御酒お下物を、鶺鴒様へ參らせるのでござりまするか」

要りが手段の酒をもて、彼の毒心を酔するぢや、そなた鶺鴒に逢うて、此地御着任以來、御領内興隆の仕法について、殊の外御苦勞なさせられる、夏が去れば秋、冬が盡されば春、人も時候のやうに緩急の度が必要ぢや、御奉公に愛身をお籠しなさるばかりが忠義ではない、偶には旨い酒の一盃も開し召されて、お身體の御養生を爲させられるも忠義の一ツ、今日は金次郎も朝早くから一獻頂戴、骨休めと申して只今夜着の中に夢を食ひ居る、粗末なれどお重詰を用意して參つた、あなたもお過しなされませ、と江戸から到來した名酒の宮戸川、彼を切に侷むるぢや、すれば彼奴例の好物、酒の香りの美しいに鼻を撲たれて、さと手を出すに相違ない、それが此方計略成就の緒酒もし盡くる時は、別室に大樽を用意して、取り替へ引き替へ酌をする、さうして朝から夜中まで、酒下物を絶つことなくば、彼奴遂に酔ひ潰れて前後不覺になるは定ぢや、彼が酒に飽く間、そなた調理の下物に飽く間、やがて此方の活きて働く時ぢや、悪い魔の睡る中にこそ神は良き民に恵みを垂れたまふ、そなた手を假らねばならぬ理はこゝぢや、明日の朝を脱漏るまいぞ」

容易きが如くして然も難事中の難事たるべき苦肉の計は、貞淑松の翠の如く、温順梅の花の如き、歌子の手に由りて成されんとす、鶴飼權太夫長く代官の職にありて、金次郎が成し遂げ行く仕事の兩端を、無雑作に破壊し去ること、もし從來の如くならば、假し十年嘔血の苦を積むとも、二十年心血の有らん限りを盡さんとも、この仕法の十分に成る時はわらざらん、櫻町四石の領内に、春の風吹き、春の水漲る時はわらざらん、さればとて彼の非を鳴らして、小田原公御耳に入れんも好んで爲すべきことにわらず、理義を説き、正邪を論じて、彼の反省悔悟を待たんは餘りに悠長に過ぐる嫌ひあり、殊に十年の月日を限りて恢復興隆の實を擧ぐべき事、堅く小田原公御前に於て誓約しぬ、然も早やその中の三分一を費したり、日は午時を過ぎて、前途尙千里遠き憾みある今、この外に探るべき手段無しと、金次郎は深く考へて、今宵歌子にその意を打ち明けぬ、幾日と限りなく、幾月幾年と際限なき間、不義の代官の相手となりて、熱き酒を脩めんこと、お歌の身に取りては大役なり、然も思はしき大役なり、人の心を酔はするは、或る意味に於てその人

を殺害するも同然、世に罪深き仕方なれど、良人の大仕事を補助するには、止むを得ず通らねばならぬ徑路なるべし、歌子はこの難しかるべき事業を引き受くるに、溢るゝ如き笑顔を以てしたり

「それほどの事、さして難しうもござりませぬ、さつと仕遂げてお目に掛けます」

「何もお上御奉公ぢや、首尾よく參ればそなた第一の功の者ぢや」

軒場を繞る夜の風は、春だけに寒く雨戸を揺かして、花の雫の落つる音寂寥たり

(七)

歌子は天の明け切らぬ間に起き出で、盥所に酒下物の用意忙しく、金次郎は残燈の淡き下に筆取りて、明日の仕事の順序など書き付け居たる時、思ひも掛けぬ報告は三幣彈正の手許近く使はれ居たる用人に由りて齎されぬ、そは彈正が昨夜小田原公のお召に由りて、急遽に小田原へ歸りたりとの事な

りき、金次郎は流石に肩を頼め

「昨夜の中に立立したか」

「急のお召しござりましたに由つて取る物も取り敢ず昨夜歸國致されてござります」

「申置きはなかつたか」

「何もござりませぬ、小田原歸着の上、改めて文通すると、只是だけでござります」

「彈正も良い武士にはなれぬ男ぢや」と金次郎は嘆息するやうに「武士は才氣ばかりでも渡られぬ、彼には一片の義氣もない」

「御歸國の上は、然るべき御役付もあるやうに承はつてござります」

「お身は大儀であつた、彈正歸國となれば用もあるまい、今日からは周平の世話になれ」

年若き用人は唯々として引き退る、濡れたる手を前掛の端に拭きながら、入り來りしは歌子なり

「只今承はりまする、彈正様御歸國遊ばされたでござりまするか」

「君命に由つて歸つたといふ、頼もしからぬ奴ぢや」

「お副役が無うては、御不自由ござりませぬか喃」

「信義のない副役は無いが優ぢや」と金次郎は吐き出すが如く云ひつゝ、「武士の詞も當にならぬのう」

「お暇乞ひ位には來らせられるが當然かと心得まするに……」

「いや私の前へ出る顔は無、彼でも約束は覺えて居る、彈正が此地恢復の事に干つたのは、殿様の御誼と私の所望とに由る、殿様の御誼には、汝を二宮の副役にする、彼と心を協せて分知の衰邑を全うせよ、と宣はせた、彈正は謹んで御受する、御受した後、我等に誓約の言葉を交した、それは外でもない、櫻町の三ヶ村芽出度く恢復、村人一同安堵の眉を開くまで、假し君命はあらうとも、決して他の役には付くまい、君命は重くとも、御加増は多くとも、この契約に背くことは致すまい、といふのであつた、然もその舌尙腐爛ずにあるに、彼の心は早くも移つて、今になつて彈正を召させられるは、

彈正が前の彈正でなく、用ゆる處あるのを知らせられたからであらう、彈正斯く用ゆるに足る如くなつたのは誰の蔭ぢや、三年近くの間私の側に從いて、私の道を聞いたからぢや、何物儘に五六年も捨て置かせなば、即て棟梁の材ともならうを、今御側へ召させられて何に爲らう、さて殿様も殿様ぢや」

歌子は金次郎が憚る處もなく、君公を批評するを聞き、壁にも耳のある世を恐れぬ、金次郎は又詞を續ぐ

「ぢやが殿様思召し、我等私議すべき事でない、彈正武士の家に生れながら、四千石恢復の大難事を我等一人の脊に負はせて、一言の相談もなく、夜逃同様に歸國すること、いかにも信義の二字に缺ける、信なき者何とて忠あらん、忠義なきもの何とて誠あらう、誠なき奉公は泥田の上に立つも同様ぢや、その中にはきと溺るゝ、水に溺れた者は助くるに道もあるが、泥に溺れた者は一生涯恥を雪ぐ道が無い、彼の前途が思ひ遣らるゝ」

云ひ掛けてお歌を見返つて

「お前はお前の命ぜられた用を勤むるぢや、不信不義の彈正に關係て、大事

の用を忘れてはならぬ」

金次郎の眼は再び机の上に落ちぬ、殘燈は消えんとして消えず、雨戸を撲つ曉方の風長閑なり

(八)

「誰かと思へば二宮の御新造か、よく來せられた、まづ此へぢや」

權太夫は朝の手水を終りたる處なり、昨夜の酒未だ覺めず、ふツとりと肥えたる頬に膏浮きて、目皮は重げに膨れてを見ゆる、縁の障子を開放して、端近う烟草盆持ち出でしが、咲きも揃はず散りも初めぬ庭の櫻の雲の如く簇りて、宛ら目も覺むるやうなるに目を轉しつゝ、笑をしげに歌子を見返る、歌子は彼が心の刺客なり、竹筒に詰めたる宮戸川は、彼が命を刺す鋭き刃なり

「お早いお目覺め、まだお寐みかと氣遣うてござりました」

歌子は何日になく馴々しき態度なりき、白粉こそ施さねど色の白きは雪を

欺き、唇の燃ゆるが如く朱きは、心の誠を現はすが如くも見ゆ

「こりや珍らしい、お前竹筒を持つて居るのう」

「今日は優れて温から、櫻も盛りと見えてござりまするに、日頃御苦勞のお骨休めと存じ、何はなくとも金次郎の誠をこれに籠めて、お重詰の用意してござります、お花見に一獻過させては何うござりまするな」

「實に意外ぢや、御新造のお手づから酒下物の御饗應を受くるは、櫻の枝に梅が咲いたやうにも思ふ、今日は何ういふ風が吹いたの」

「温い長閑な、好い風でござります、金次郎も久し振に御酒を過して、今朝は休足、お夜着の袖に包まれて居りまする」

「ほ、金次郎殿、晝寐してお在か、それは不思議ぢや、明日は雨が降らうぞよ」

「まづ一獻召し上りませ、これにお盃の御用意もござりまする」

歌子は總てに如才なかりき、彼女は竹細工の提籃を用意しき、提籃の中より取り出すは、竹根の盃なりき、蒔繪したる折敷なりき、更に新らしき竹の

箸なりき

「まづ一つ召し上りませ」

「さうかの、さらばお詞に甘へて頂戴するかの」

權太夫は好もしさうに盃を取り上げぬ、歌子はすり寄り、酒を注ぐ

金次郎のこの苦肉の計略は、思ひの外に功を奏しき、權太夫は舌鼓を打ちながら、二三盃は息もつかず飲み乾し

「こりや上酒ぢや、こりや名酒ぢや、この邊にある田舎の酒とは理が違ふ、

何處から取り寄せたの」

「江戸の宮戸川と云ふことでござりまする」

「さうあらう、こりや普通の酒でない」と又五六杯を傾けて「どうぢや、お前も一つ相をせぬか」

「私は不調法、果も爲りませぬ」と歌子は満面に笑を含みつ、「その代り何時までもお酌致しまする」

「それは意外、私の爲めに酌をして呉れる、古今未曾有の珍事、古今未曾有

の歡び、土臭い田舎者の酌とは違うて、お身の手てに酌しやくを受けると、一段酒の味あじを深かう覺おぼゆる、さらば雜作ざいさくに預あづかるか

「御遠慮ごえんりよなく、お下物したものも召めさせませ、今朝けさは好よい魚うながなうて、思おもふやうの御料理ごりやうりも調ていきませぬ」

彼女かのぢよは重詰ちゆうぢつの蓋たかを開ひきぬ、中ちゆうには煮肴にまがな、鹽しほ焼やき、酢すの物もの、浸ひし物もの、山海さんかいの珍味ちんみ堆たいくかを盛もられたり

「何なにから何なにまで、心こころを籠こめた料理りやうり、何なによりもまづお身み達たち夫婦ふうふの志こころざしを賞しょう翫くわんする、この下物したものにこの酒さけ、その上うへ又また芳かほばしい志こころざし、此こゝ上うへもなない満足まんぞく、どどりやお身みの心こころを味あじはう」

權太夫ごんたふは引ひきかけ、呑のみたりき、竹筒たけとうの酒さけ盡つくる時は、他たに用もち意いしたるるを持ち來きたり、重詰ちゆうぢつの肴さかな盡つくる時は、又また新あららしく調てい理りして運はり來きたる、權太夫ごんたふは朝あさより飲のみかけて、夕暮ゆふぐ近ちかくなりたるが、今いまは泥どろの如ごとく酔よひ潰つぶれて、前後ぜんご生なま體たいもなく寐ね入りたり、歌子うたこは權太夫ごんたふが夢路ゆめぢ深かく分わけ入いるを見届みとけて陣屋ぢんやへ歸かへる

來きたる日も是こゝれ、又また來きたる日もこれ、歌子うたこは權太夫ごんたふの側そばに付つき切きりて、絶たえず酒さけを侷くめたり、權太夫ごんたふは酒さけの爲ために生なくるもの、酒さへあれば他たに望のぞむ所ところも無なし

權太夫ごんたふは斯かくして日ひごとごとに酔よひ潰つぶれぬ、權太夫ごんたふが歌子うたこの酌しやくに酔よひ潰つぶれてあある間ま金次郎かねじらうは有あらゆる方かた面めんに手てをつけて、有あらゆる事こと業わざの整ととのへに掛かりぬ、雲くもあればこそ月つきの光ひかりは潜ひそるれ、雲くもなき空そらには小こさき星ほしも輝かがき渡る、金次郎かねじらうの活くわつ動どうにつれて其その下した役やくも亦また活くわつ動どうしぬ、金次郎かねじらうの主しゆ意いを體たいして、櫻町うづみぢ興きよう復ふくを任まかせせる善ぜん良りやうの農いん民みんも、皆みな一いつ齊せいに働はたらき始はじめぬ

(九)

されど權太夫ごんたふは知しらざりき、櫻うづみの花はな散ちり、若葉わかば繁さかり、老おと翁ういの聲こゑも絶たえて、杜宇とこの血ちに鳴なく頃ときとなれど、彼かれは相あ變からず酒さけ浸ひしとなりてありき、岸右衛門きさゑもん一派いっぺいの者ものは近ちか來き頭領かぶつりやうの出遊しゅつじゆうなきを怪あしみて、屢しばしば次つぎ村むら々々の巡視じゆんしを願ねがひ出いづれど、頭領かぶつりやうは酒さけに魂たましひを奪うばはれてありき、幾いく度たび來きたり尋たずねても、權太夫ごんたふは歌子うたこの酌しやくに飽あ

く様もなく酔ひて、何事も耳に入る氣色はなかりき、今日も亦岸右衛門勘十
作兵衛打ち揃うて尋ね来りぬ

櫻町には儀棚引きて、一帯の山川草木、皆な活々と生氣ある色を見する、
心あるも心なきも、皆な活氣を呈し來る、その中に只一人不平の色を見する
は岸右衛門なり、岸右衛門はその身の居住する土地の總てを、何時までも雲
の手に掩はせて置きたかりき、岸右衛門と同じ關係を持てる百姓は、又皆な
岸右衛門と同じ希望を持ちぬ、然も權太夫の酔ひ潰れて、來る日もく歌子
の酌に泥の如くなり居れる爲め、櫻町に日の輝きを見るに至りぬ、僅かなが
らも美しき日の光りを見るに至りぬ、岸右衛門はこれを恨めしく口惜しく思
ふなりき

「岸右衛門參つた氣、お逢ひなされまするか」

歌子は酌をとりつゝ云ふ、權太夫はとろんとせる目を圓うして

「岸右衛門來たか、恰ど好い、一つ遣はす」

「村の事に付き、急々御意得たいと申す氣、御酒など仰せられては、さぞ立

腹致さうと心得まする」

「酒を見て腹立つほどの彼ではない」と今にも頰れさうになりし身を、脇息
に支へながら、「岸右衛門にも久しう逢はぬ、これへ通してたもらぬか」

「さらば、これへ……御逢ひなされまするか」

「いかにも逢ふ、岸右衛門は乃公の手足ぢや、疾く呼ばせ」

歌子は心得て岸右衛門をこれへと云ひぬ、勘十、作兵衛、皆な次の間へ膝
行り出づ、權太夫は見て

「岸右衛門か、よく參つた、まづ一つ飲み」と前にある盃をさし出す、歌子
はそれを取り次いで

「鶴飼様、お盃、お受けかの」

「いえ」と岸右衛門は苦り切つて「私御酒頂戴に參つたのではござりませぬ」

「ま、左様に堅い事を云ふな、時は春ぢや、久しう出ぬが四邊の山々に櫻の
花も咲いてあらう、まづ一つ飲み」

「お代官は何時までも櫻の花が咲いてあると思し召すかな」

「左様に堅い事は云はぬものぢや、これは金次郎が心注いで江戸から取り寄せた宮戸川、田舎酒とは違つて一段と香氣が好い、兎も角も一つ飲み」
「お酒よりはお役儀がお大事でござります、代官様御目に村の様お分りになりませぬかな」

「村の事は村の事、酒の味は酒の味、堅い事は明日聞き、旨い物は甲夜に食へ、乃公は乃公で思案がある、お身達はお身達で百姓に精を出せ」

「いえそれでは旦那、兼てのお約束が……」と勘十は云ひかけて歌子に氣を兼ね、「一度外へ出て御覽なされませ、旦那が閉ぢ籠つて在らせらるゝ間に、櫻は悉く散つてござります、村にも字にも、新開の地が澤山に出来てござります」

「もう好い〜」と權太夫は手を振つて「酒が醒めたら行く、お身達はもう歸れ」

「旦那の御酒のお醒め遊ばす中には、四千石の土地が立派に繁昌するでござります」と岸右衛門は莞爾ともせず「何故それほど情無いお心にお爲りな

れたのでござります」

「今日も酔うた、昨日も酔うた、この分では明日も酔はうぞ、世に酒ほど好い物はな〜、皆が許せ、他愛ない〜」

權太夫は云ふが否な脇枕、云ふが否な高舁、室の中には酒の香り霧の如く満ちて、縁よりさし入る夕陽の影、三人の呆れ顔を正面に照らしぬ

「旦那お心は……あア」と作兵衛は失望の色を見せ「前のお心では無い、斯うして宮戸川にお酔ひなされてある間、二宮様は村々の仕法をお付けなされます、御新造はようお守を爲されます」

「鶴岡様お退屈、私が出来てお心を慰める、これもお上へ御奉公ぢや」と歌子は直沈着に沈着き「お前方口上、お目覺めを待つて申し上げるわいの」

「二宮の旦那様、好い御新造をお持ちなされて、お仕合なことぢやのう」

これを最後の詞にして、岸右衛門、勘十、作兵衛皆な去りぬ、歌子は權太夫の足元へ掻巻被せかけ、酒の香に包まれて、終日心にも無き笑顔を見する、胸の塵を拂ふべく悠然として縁へ出づれば、三日見ぬ間に櫻は散りて、花の

跡寂しき庭を、胡蝶一翅香を尋ねて飛び狂ふ、春逝きて若葉匂ふ、衰亡の村
の様、苔の底には秋風吹くかと、且つ見るからに憐れなり

九入



貧富の差

世は貧と富との別ありて、雲と泥と相違あれど、その貧富の分るゝ所以の本を尋ねれば、たゞ僅かに前と後との差のみ。そも、強強家は、明日の爲めに今日之を勤め、明年の爲めに今年働くなり、故に其身益々富貴となるなり、然るに懶惰者は右に一轉して、昨日の爲めに今日之を務め、昨年の爲めに今年働くなり。之を以て一生道ひつゞずして貧に苦むなり。

第三章

(一)

金次郎仕法の要は、衰頹疲弊の極に達せる櫻町一帯の地より生ずる米穀その他の収益をもて、領主の生活、役人の扶持、諸民撫育の用財を辨じ、その餘れるを以て荒地開墾の費に充てんとするにありき、故に従来大久保家より宇津家へ補給し來りし金銀米穀は、その年より悉く廢止さるべき旨を言上して許可を受けつ、宇津家の分度は豊凶十年を平均し、一ヶ年千五苞と定めて、その分を超ゆることを許さず、剩れるは貯蓄して萬一の用に備へ、尙剩れるは土地開墾の費用に充て、少も無用に費消せず、荒地開拓その他に必要な金子は、田地家財を賣却して持ち來れるを流用し、一點の私なく、一毫の曲事なく、従来金子を本位として興隆恢復を謀りたるを、全然遣り方を變へたれば、下役人は奸智を施すに處なく、不良不義の百姓は濡手に粟を握む機會なく、寄ると觸ると金次郎の仕法の道に外れたるを惡口しき、誠實を主と

せる金次郎の仕法は、不誠實に由りて甘き汁を吸ひ來りし下役人その他の致命傷なりき、金次郎に對する反抗は此等の人の發頭に從ひて、此處彼處に起り來る

中に最も苦痛を感じたるは、鶴岡權太夫の下役として、小田原より附隨し來れる赤松、持田、大篠の三人なりき

金次郎いかに誠實を主とする仕法を立つるとも、鶴岡殿斯くて在す間は、彼をして名を成さしむることあるまじ、彼が營々として積み來れる石崖は我等手に由りて一夕の中に破壊せん、事を成すは總て金にあり、金を本位とせぬ仕法のいかで成就する時あるべきや、とは彼等三人と權太夫との口と耳とに呷かれたる處なりき、然もその頭領たる權太夫は日ごと夜ごと、お歌の酌に酔ひ潰れて、宛ら死したる人の如し

偶々密事を打合せんとして尋ね行くことありても、彼の舌には呂律なかりき、彼の唇には判然としたる聲なかりき
「その様なことは捨て置き、江戸から來た宮戸川飲まぬか、この酒の味に如

くものはなく身に泌みて旨いぞ、御新造酌をして遣はされ」と何日も同じ語、いつも同じ醉態、いつも同じ調子なりき、流石の三人衆も愕れて引き取る外、詮術なかりき

三人衆は頭腦を失ひぬ、頭腦は失ひたれど、金次郎を憎しと思ふ心は止まざりき、時に觸れ、機に觸れて、勢力回復の謀議を凝らしぬ

金次郎は權太夫が酔ひ頹れ居れる間、漸く水帳を探り得たりき、彼はこれに由りて、村と村、字と字、家と家との境界を分明に見知ることを得て、暗夜に燈火を見たる歡びありき、金次郎の眞心は、櫻町一帯の人、禽、草木の色にまで現はれ來りぬ

三幣彈正の去りたる後は、横山周平只一人金次郎の助手なりき、彼はお歌が日ごとに權太夫の許を訪ふ如く、日ごとに金次郎の陣屋へ來りて、其説を聞き、其仕事を替くるを樂みとしき

「北國の流民も昨今漸くその堵に安じた如く見えませす」
「善い土に植ゑた木は、思ひの外に早う育つ、人も同じぢや」

「それでもまだ岸右衛門一派の悪戯に苦められる様が見えます」
 「毛蟲も天の恵みに浴すると美しい胡蝶になる、何事も時節を待つぢや」
 「序に伺ひます、先生は北國から参つた流民を、如何やうのお心で撫育なされまします喃」

「面白い事を尋ねる喃」

「御子息同様にお扱ひでござりまするか」

周平は思ひありげに問ふなりき、金次郎は莞爾笑ひて

「世に生を受けた者、我子を愛し育まぬものは無い、子の爲には血を絞るを厭はぬ、子の爲めには骨を砕くを屑とせぬ、けれど流民を撫育して、長くこの村の民とするには、それに況した撫育を要する」

「御子息よりも……」と周平は不審の眉を寄せながら、「移住民を御愛みなされましますか」

「いかにもぢや」と金次郎は力ある聲「我子には骨肉分身の親みがある、けれど移住民は根が他人ぢや、その間に自然の樂みがあるでは無くて、唯恩義

に懐くばかりぢや、骨肉分身の愛は自然に生るが、他人他姓の愛は人の爲めに作られる、殊に生れた土地を去つて、他郷他國に放浪するほどの者、心掛の好い者は必ず無い、それを化してこの村の良民とするには、我子を愛するよりも、幾層倍の愛情を注がねばならぬ、私は常にこの心をもて村々に臨んで居る」

周平は金次郎の美はしき心を聞き、金次郎撫恤の渥きを知りて、思はずも同情同感の涙に暮れぬ、無頼放浪の流民に對しても、心を用ゆること此の如く切なり、在來の農民を厚く待遇すは、云ふまでも無き事、問ふまでも無き事、更に新しく稱するには足らぬ事、周平は暫く無言なりき

「私は斯程まで農民の味方となつて居る、農民の爲に寢食を忘れるを、貴公目前に見て居やう、當地へ参つてからも是足掛五年になる、貧困の爲めに一家を失はうとする者には、田地も貸して遣り、負債を償ひ、時には米を恵み、衣類を給し、及ぶ限りの便宜を興へたが、悲しい事には其效が少しも無い、荒地の草は刈り取ても又生へる、けれど刈た當座暫時は美しく馴らされ

てあるが常ぢや、斯うなると、衰へた村の難義は、荒地に生へる草よりもまだ甚い、私は恩恵を垂れるほど、艱難の増すのを認める、災害を救はうとすれば救はうとするほど、却て産を破る者の多くなるのを感じ、私も幼い時父に別れて、唯一本からはだけの身となつたが、當村の興復程骨の折れることは知らぬ、最も國許を出發する時、此業不幸にして爲らざれば、生て再び故郷の地は踏むまいと覺悟して出掛けた、此上どれほどの艱難に出遭ふとも、中途で志を挫く事はせぬが、然しちと仕法を改へずばなるまいと考へた」

周平の隣は思はず進みぬ
 「それには私にも考へのない事ござりませぬ、只今の模様では先生に御苦辛あるばかりで、實效がちとも擧らぬ、宛然で焼石に水を掛けるやうでござります」

「貴公もそれに心付いて居るか、私はつくづく思ふに、この領内の山々には枯れた木がいくらもある」

「夫はござります、繁昌隆盛の土地に育つ樹は、自然と枝葉も繁茂するでござります」

「活氣は無うても活きてさへあれば、水や肥料を吸ひ込む力がある、けれど當村の百姓共は、全く枯木に齊しい者がある様ぢや」

金次郎は考へながら云ふ、腹心ながら他の役人と思ふ心あるが故、彼は如才なく周平の心中を引き試むるにてぞある、周平は我意を得たる如く

「其儀は私にも心付きござります」
 「流石に嘯」と金次郎は沈として「貴公何のやうに心付いたな」

(三)

「枯れた木に肥料を與るは、却てその幹を腐らすに當ります」

周平の云ふ處は義理極めて明白なり、金次郎は頷きて

「其處ぢや、私の考へて居るも其處ぢやよ、無頼の輩には多年不義不徳を事とした天罰、漸くその身に報はうとして居る、自身の幹から出た蟲が、八九分までも樹身を蝕て居る、これに恩恵を施すは、枯れた木に水を灌ぐも同様

「ぢや、恩を施さんとして滅亡を促すのは、天理に背いてある、私は今日から手をしめて、成るべく恩恵に遠ざからうとする、どうあらう」

「部下の急と心得ます、然し枯れかけた樹に水を絶つは、餘り不仁ではあるまいかと懸念致しまする」

「水は絶たぬが肥料を絶つ、金子や米穀を與へて居た手をしめて、勸善懲惡の主意を聞かせる、彼等もし夫に由つて心を改むれば、枯木にも花が咲く、そこで培養の道を講ずる」

「先生御説諭に耳を貸さぬ者あつた時、どの道を取らせます、耳を掩ふ者は、聖人も道を説き聞かす術がござりませぬ」

「毒草は枯るゝに任する、枯れた木は根を掘り取て、その後へ新らしい芽を植うる、されば必ず成長する」と金次郎は獨言のやうに云ひつゝ、「あア今までの仕法は姑息であつた、私は根本を過つて居た」

「至極御同感」と周平は直ちに同じて「先生お手許には限りがあつて、百姓の困窮に涯りござりませぬ」

「明日から戸ごと道に説いて廻る、私の詞に耳を傾ける者は、多少の生氣があるものぢや」

「御主意のほど、一統へ申し傳へるでござります」

周平は自ら領内を駆け廻りて、金次郎の主義を披露し歩かんといふ、彼は忠實なる金次郎の補助者にして、又正直なる金次郎の腰巾着なりき

「金で頭を擲られるのを歎ぶ者は、無手で道理を聞かされるのを怒るものぢや、斯う云ふ時には兩刀の威光に限る、貴公の力を借りねばならぬぞ」

「善は急げ、今から出掛けます」

周平は云ひ掛けて起ち上りぬ、縁の外には温き春の風吹き渡りて、鶯は何の恵みに肥えてやあるらん、羽風美はしく枝から枝を傳ひて、ひら〜と散る花の影を逐ふが如く、彼方の枝より此方の枝に移りながら、金次郎の勞苦を慰むる如く囁ぶる、周平は其處に立ちて、沈と庭の景色を見て居たるが「先生、春の神は天地の自然にのみ恵みあつて、人間には恵みないと見えぬ」と恨みがましく云ひ出でぬ

「櫻は時を違へず咲き、鶯は時を違へず鳴く、時に正しき者は行爲に正しく、行爲に正しき者は自然神の恵みを受くる、これは天の理ぢや」

「櫻は悪心を持ちませぬ、鶯は悪事を致しませぬ、それで何日の春も、長閑に日を送るでござりまする喃」

「人も花も要りは同じぢや、私も後から出掛けらう」

「お役目とは申し條、幾重にも御苦勞を感じまする」

周平の聲は例のやうに牙えくしからず、周平の姿は何處となく影淡き如く見えしが、金次郎は内支關まで見送りて別れたり「さらば」と只一言を云ひ交して別れたるが、この一言こそやがて現世の別れなりけれ

周平はその日物井村の五六戸を巡りて、當村恢復の主意を演述し、心地優れずとて引き返したるが、その夜の中に空しくなりき、急性卒中といふ事なり

金次郎は此報を聞くと齊しく、取る物も取り敢ず周平の宿所に駆け付けたるが、更にその甲斐あらざりき、昨日までも今日までも金次郎の片腕となり

て、道を説きたる唇は堅く鎖され、夕風寒く櫻の花の散るを見て、不覺に世の儚なきを感じたる眼は、氷よりも冷たくなりて空しく臉皮を閉ぢたるを憐れなる、金次郎は思はずも手を取りて

「貴公、私を捨てたのう、興復の道まだ緒をも得ぬに、貴公私を捨てたのう」
金次郎は前に彈正の仕官せるに由りて片腕を奪はれ、後に周平の死に由りて又その片腕を失ひき、彼は全くの孤立となりぬ、多くの敵、多くの悪口罵詈雑言の中に、只一人立つ身となりぬ、彼の事業は愈よ困難の境に入らん

四

周平死してその墳墓の露も乾かず、櫻の花名残なく散りて、牡丹の香り漸く遍からんとする時、鶴岡權太夫の下役なる赤松、持田、大篠の三人は岸右衛門の座敷に集りて、金次郎の事業を破壊すべき恐しき相談を始めたり、中にも大篠代藏は酔ひしれて、呂律も定かならぬ舌に、したゝかの氣焔なりき「金次郎が何ぢや、高が栢山の百姓でないか、我等身分こそ卑しけれ、代々

お上御扶持を戴く、假にも武士の端に列る者が、百姓の指圖を受けて何うする、速かに追ひこくらしいでは、我等一分が立たぬでないか

「正しく……」と赤松嘉兵衛赤き唇を舐ながら「……重役は今日もお歌の酌に酔はせられてある、この分では急にお目も覺めまいと存ずる、君公お見出しに預つて、櫻町四千石の代官職を承はり、拙者共一統の上に立ちながら、農民町人の安危を度外に置き、政治向一切を金次郎の手に任せて、日ごろ不義の酒に酔ひ潰れる、左様の重役無いも同じぢや、我等職分は卑しくとも、やはり君公の御家人、忠義に重い軽いは無い、重役は重役として捨て置き、我等は我等で姦を對る手段を巡らさうで無いか」

「御兩所御高説、さし當つて我意を得つる、而て工夫をさるかの」
「きろりとせる眼に四邊を見廻すは持田伊助なり、嘉兵衛は聲に應じて、手段として別に無いが、金次郎の仕方、追々邪路を辿るやうぢや」

「大きに左様、斯程の大事を成し遂ぐるに、お上より一文のお助けをも受けぬといふ、これが抑もの間違ひ、金次郎何かといふと、誠實、誠實の間から

生れた化物のやうに申すが、誠實ばかりで腹は膨れぬ、飢を凌ぐはやはり米ぢや、これが第一の失策、それから一たんは貧窮頼る邊の無い者共へ、金銀米穀を恵みなどしたやうであつたが、昨今は水の手が涸れたと見えて断然廢止、やはり是へも誠實勤儉の押賣を致し居る、ぢやに由つて御覽なされ、一度は彼の手に蘇生の歡びを見た音藏父子も、近頃は木の芽を嚙つて、飢を凌ぎ居る様子ぢや」と代藏は卓を叩いて云ふ

「櫻町の疲弊は、病疾に苦しむ人間と同一事、恢復の興隆のと難しい議論を主張するには及ばぬ、病氣には良薬、困窮には黄金、處方は昔から定つて居る、それに金次郎近頃財布の口を閉めて、誠實ばかりを振廻すは、大病人に人参を取上げて、葛根湯を服させるやうなものぢや、仕法の徳何れにござらう」と嘉兵衛は口角に唾を飛ばし、「詮ずる處、彼奴自己分際を顧みず、村方の百姓を救ふやうな目算で、遠路の處をわざ／＼参つたが、思ふやうに仕法も付かず、三幣殿には逃げられる、配下の百姓は誠實に中てられる、お負に周平は頓死、何とも手の付けやう無い處から、そろ／＼逃仕度を致すと見えぬ、

言語同断の癡漢、斯様な者に御當地仕法御委任あらせられるは、小田原十一萬石の恥辱ともなる、どうぞや、御兩所へ相談ぢやが、當家の主人は勿論、勘十作兵衛其他の者とも談合、我等の名に由つて、お上へ訴訟致さうではござらぬか」

彼等は金次郎が仕法を更へて、絶対に黄金の力を借りまじと覺悟し、貧に迫りて逃亡するものあるも救ず、先祖傳來の家屋敷を手放して、他郷に流離するものあるも助けず、只誠意誠心に頼りて、興復の實を擧げんとするを見、日頃の鬱憤を散ずるは此時なり、金次郎を逐ひ斥けて再び黄金を土臺とする仕法の昔に翻すべきは此時なりと、こゝに類を集めて、金次郎排斥の相談に着手せるなり

(五)

腐れたる物には蠅集る、三人の下役に、金次郎排斥の相談ありと聞きて、一味の百姓續々と來會す、頭取は岸右衛門なり、口利は作兵衛なり、内心に

は金次郎の徳に懐き居れる者も、彼等威勢を恐るゝあまり、御多分には漏れず席に列なるものもありき、もし歌子をしてこの模様を見せしめば、恐しき鬼の集會と云はん、誠實正義を敵として道に外れたる言葉を弄するもの、云ふまでもなく悪鬼なり

「金次郎の仕法、四千石の領地を再興するのでは無うて、三ヶ村の土臺を覆すのぢや」と嘉兵衛は一座を見廻し「お身達は何んと思ふ喃」

「皆な左様に心得をす」

第一に賛成の心を表はすは岸右衛門なり、續いて作兵衛

「私は二宮の旦那が怨めしうござります、二宮の旦那がお引き受けにさへならねば、當地の興隆は鶴岡様のお手で、疾に爲きて居たでござります、何か鶴岡様はお上からお金を引き出して、どしどしとお蔭きなさる、金の力で能きぬことのない世の習ひ、早い話が誠實の前に手を突くものは無くても、黄金の前に頭を下げぬものはござりませぬ、のう皆の衆や」

「私共はお金さへ頂戴すれば、田地畑畑はいかやうになりませうとも、悲し

く思ふ所はござりませぬ」と満座の農民異口同音なり

「そなた夫ほど金が欲しいか」と伊助は笑ひながら問ひぬ

「お金があれば遊んで居ります、苦しい思ひをして荒地を拓くよりは、懐手をしてお金を戴くが結構でござります」

あはれ遊惰の民なりき、遊惰に馴れたる民なりき、金と聞きてはその蒼白く瘦せたる顔に、淋しき笑を見せぬは無し

「その金何ほでも得る道がある、どうぞや乃公の云ふことを聞くか」と嘉兵衛はきつと云ふ

「どんな事でも聞きませぬ」

「外ではない、金次郎をこの村から逐ひ斥けるぞや」

「願うても無い事、然しそれが味好う爲さするか喃」と作兵衛は眉を顰めて「承はれば小田原お殿様、甚う二宮様を御信用と申しませぬ」

「殿様にはお目がある、黒白は直にも見させられる」と嘉兵衛は膝を進め「ぞやが十年と期限してお遣はしなされた役人、一通りの事ではならぬ、乃

公達も同じ御家來、金次郎の事を悪く云ひたくはないが、お身達が氣の毒ぢやに由つて、こゝに訴狀を認める、——訴狀と申すは、要りが金次郎仕法不都合の廉々を書き列ねて、君公お手許へさし出すのぢや」

「さて、御苦勞でござります」

並び居る百姓は異口同音、何事も嘉兵衛の詞に違はじとするなりき

「然し、我等ばかりの判ではならぬ、岸右衛門を始め、村々の重立つた輩、何れも調印致すであらうな」

「お金にさへ爲りますることなりや、謹んでお指圖に従ふでござります」

「金次郎さへ逐ひ退くれば、従前の通り御用金をお下渡しになる、きつと致すか」

「天地神明御照覽、決して二心は持ちませぬ」と岸右衛門は一同を代表して云ふ

「よし、さらば」と嘉兵衛は代藏を見返つて「大篠殿は達筆ぢや、訴狀お認め下さるまいか」

「心得た、暫く待たせられ」
代藏は筆紙に對ひぬ、彼の粘り氣ある文字は、金次郎の仕法を非難するに於て倔強の武器なりき、金次郎が櫻町の恢復に着手してより今日に至るまでの徑路、方法、二三ヶ月前より實行し居れる手段、善き處は悉く省きて、悪と思ふことのみを數箇條に認め、まづ嘉兵衛の前へ出しぬ、嘉兵衛は一同に讀み聞かせたる上、自ら捺印、續いて伊助、代藏、岸右衛門は三ヶ村の同志を代表して、總代の印判極めて明白なり

(六)

夏も早や最中となりて、炎熱宛ら焼けるが如き六月中旬の事なりき、歌子は今日も横太夫の相手となりて、心なき笑、心なき酒の相手に暮らして、日のちり／＼落ちんとする頃急ぎ足に陣屋へ歸る、軒場を吹く夕風涼しく、夕顔棚に満月の露溢れて、いつもは極樂の如く長閑なるべき奥の間が、今宵は何故ともなく騒々し

金次郎は柳行李に多くの書類を詰め居り、その左右には書役二三人、命ぜらるゝまゝに筆取りて忙しげに何やらん認むる、其態度例にはあらざりき
「只今歸りました」と歌子は次の室に手をついて「今宵は何事でございますか」
「急に江戸お屋敷へ参らねばならぬ」と金次郎は他目も觸れず「今用意をして居る處ぢや」

「思ひ掛けぬ、何か御用ござりまするか」

「お殿様より急のお召ぢや」

「愈よ合點参りませぬ」と歌子は眉の間に曇りをみせて「御用の次第、お心當りござりまするか」

「無い事も無い、赤松、持田、大篠の三人、先日伴れ立つて江戸へ参つたといふ、私のことを悪ざまに御訴訟申し上げたであらうと察する」と金次郎は例の如く自若たり

「爾うござりませうか」

「外に御用のある筈は無い、櫻町興復は十年を期限してある、その間の仕法、

總てを私に御委任あらせられた

「何かお咎めあるのではござりませぬか」と婦人だけにおろくして「私に心配してござります」

「不義した覚えもなく、又不正した事もない、この心天地に愧ぢぬ」

「然し、讒言ほど恐ろしい者はござりませぬ」

「讒言よりは不義の罪が恐ろしい、そなたは後を大切に留守するぢや」

「お留守はさつと致します」と歌子は力ある聲「何日お立ちでござりまする」

「今夜出發、随分急いで明日中江戸着の豫定で居る」と金次郎は行李の紐をしめながら「事あることに思ひ出さるゝは横山ぢや、彼が居たら私も安堵して出發さるゝ」

「私は女に生れたを残念に思ひます」

「そなた心を丈夫に、私の代理となつて、この陣屋を預からねば成らぬ、男も女も誠の道に二つは無い、第一は彌太郎、第二は鶴岡權太夫、そなた手一

つに任せて置く」

「只御安堵なされませ、私の心には誠の影は宿つて居ります」

「うむ」と金次郎は頷いて「安堵して行くぞ」

「何事の御用か知りませぬ、萬一仕法についてのお尋ねどもござりましたら、立派に辯解をなされませ」

「辯解はせぬ、只有のまゝを申し上げる」

歌子は金次郎お召と聞きて、如何なる大難や降り蒐ると、女心に一方ならず心を痛めしが、少しも顔には現はさず、精悍しく良人を慰めて、首途を祝ふ昆布、勝栗、新らしき土器に銚子まで添へて持ち出で

「天照皇太神宮御神酒のお下りでござります、祝うて一獻喫らせませ」

「折柄の馳走ぢや、有難く頂戴する」

金次郎は土器を取り上げぬ、夏の月は清く青葉の庭を照らして、明く白日の如き砥石の苔の上には、蝦蟇の眼きらりと光りを放ち、繁る樹の間の暗さ中には、三つ五つ残る螢火燃えて、世に亡き周平の魂かと凄し

壘所より内立關へ掛けては、今宵金次郎が江戸へ出發すと聞き、その行を見送るべく來れる農民と出入の者として充たされぬ、何れも金次郎の徳に懐ける者なり、中にも萬兵衛、惣兵衛、善兵衛の三人は、常に金次郎の徳を慕ひ、金次郎の事業を扶けて、正直に働ける者なるが、切ては村盡處まで見送らんと、草鞋脚絆に身を堅め居たりき

金次郎は歌子の薦むる祝ひ酒に酔を作して、快く立關へ立ち出づる、背後には歌子、右の手には彌太郎、聞分けよく別れの詞を繰り返して

「お父様御機嫌克う……お父様御機嫌克う……」

金次郎は嬉しげに額を撫でつゝ

「溫和しう留守するぢや、無理云うてお母様困らせてはなるまいぞ」

立關の内庭より門外まで溢れたる農民は、口々に詞を掛け

「旦那様早うお歸り下さりませ、旦那様お越しが無うては、村中が暗黒でござります」

一方に岸右衛門一派の反對あると同時に、一方には又順良なる多數の味方

ありき

(七)

「二宮金次郎、御目見得にござりまする」

二の間に伺候せるお側用人松下良右衛門は高聲に披露しぬ、金次郎はこの披露につきて、三の間の末座に平伏しぬ、只見る、上段の間の簾は皆な捲き上げて、左には蔭繪せる脇息、うしろには年若き小姓、御刀架、御烟草盆、文臺、硯箱、數々置かれたる間に、公は泰然と坐を占めたまふ、淺黄帷子の上に白麻の袴召されて、徐に御目を金次郎の上に注がする、其態度威ありて猛からず、温乎玉の如き中に天下大老職たる品格備はりて

「金次郎か、態々の出府、大儀であつた」と應揚に聲掛けたまふ

「御意でござる、近う進まれ」
良右衛門は再び云ふ、金次郎は憶したる様もなく、ずつと進む、其處へお

これにも良右衛門の披露ありて、三人は金次郎と反対の側に坐を占めぬ、忠貞公は彼等三人より提出せし訴状の文面に由りて、直々金次郎に問はずべき事あらんとなりき

「さて金次郎、こゝに面倒なこと起つた、そなたまだ足許に火の燃え付いてあるを知るまい」

「何事も存じませぬ」

人には目があつて物を見る、耳があつて物を聞く、更に心があつて見る物聞く物の善悪可否を判断する、それに居る三人は、そなたと同じく櫻町へ参つて居た者ぢや、存じて居らう」

金次郎は顔を擡げて、赤松等三人を視上げぬ、三人は黙然たり

「黙く存じまする」

「この三人、そなた仕法の様を見、又そなた仕法の風評を聞いてある」

「御意にござりまする」

「然る處、そなた仕法は櫻町を恢復するのでは無うて、櫻町を覆すのぢやと

いふ、下々の者は皆なそなた仕法の宜しからぬを怨んで、四千石の領内、絶えず風雨が吹き荒むと申すことぢや」と側にある一通を取り上げさせ「これに三人から訴状が出てある、三ヶ村の百姓總代の印を捺されてある」

「私、不徳の致す處、何とも恐れ入つた儀でござりまする」

「訴状讀み聞かせうか」

「それには及びませぬ」と金次郎は詞清く「私にも目がござりまする、將耳がござりまする、三人衆御人品、従いては又御心情、三ヶ村の百姓總代と申し張る岸右衛門——百姓の名は聞き落してござりまするが、物井村岸右衛門それでござりませうな」

「いかにも岸右衛門、名主まで勤めたことあるといふ、然るべき者と見ゆる

「私、悉く存じて居りまする」

「さらば文面を讀み聞かせるに及ばぬ、そなた心に覺えあるか」と忠貞公の

御詞は鋭かりき

三人衆は息を屏めて、金次郎のいかに答うるかを考へ、執次役を承はる松

下良右衛門は、片唾を呑みて金次郎の舉動を視詰むる、金次郎は暫く無言、

やがて壘に突き居たる手を、徐に膝の上へ引きて
「恐れながら言上、早や足掛五年にもなります、私家は御領内栢山村の草
分代々村役をも勤め居りましたが、親の代より微祿して遂には一家分散の悲
みをも見てござりまする、身に着ける物としては一枚の襦袢、家に残ります
る物としては、只二人の弟、私はその数年の間に、人間の身に絶えぬほどの辛
酸を嘗めてござりまする、なれど生れて一點の私無く、一圓に正直、一圓に
誠實、一圓に天道を則として、一生懸命に出精致した甲斐、一苞の米を得た
るより現はれて、僅に父祖の家を興すことを得たでござります、その餘徳は
百姓の身に思ひも掛けぬ、御家老服部様御身上の仕法を付け得たでござりま
する、然も又その事御聞に達して、櫻町四千石の荒瀬、恢復の仕法計るべき
旨の御沙汰、歴々御役人衆お力を以てせられても、其實を見ぬ難事中の難事、
私ども下賤無學の徒に、爲し得べき事柄にては無きと存じ、再三御辭退、再
三御断り申し上げたを、殿様一向に御聞き入れなさせられず、三年の久しき

間、是非私一身に引き受け、恢復興隆の實を擧げるやうとの御懇命、遂に御
辭退の詞も盡き、まづ仕法書調製、仕法の主意、篤と御聞きに入れ奉つた上
私一身に引き受けて、櫻町へ参つたるを、殿様御忘れはあるまいと信じます
る

云ひかけて忠真公を額越に見上げたる、その眼の光焔は日の如く輝きて、
中に籠る誠忠、誠實の心、宛ら石火矢の如く公の御胸深くを射たりき
公は只默然として聽きたまふ、壁立千仞攀づべからざる山嶽に對する如く、
御息も急しく、仰ぐが如に金次郎の泰然たる姿に對したまふ、幾間かを通し
たる廣き座敷は、良右衛門も無く、三人衆も無く、襖も無く、紙門も無く、
小姓も無く、籠も無く、只忠真公の儀容のみありき、只金次郎の熱誠のみあ
りき

(八)

金次郎は又詞を續く

「これに當時の帳簿をも所持致し居りまする、私櫻町の恢復をお引き受け申し上げたは、それに由て此身の名を成さんとの心ではござりませぬ、これに由つて譽を近國に馳せんとこの心でもござりませぬ、神々も御照覽、私の心には利祿もなく、名譽もなく、一點の眞あるばかりでござります、御領主様御爲め、櫻町三ヶ村百姓衆の爲め、身命を擲つて、成し遂ぐべき事業と存じ、栢山村出發の際は、蟻が塔を積む如くして貯へた家財諸道具、皆な賣代したでござります、十年と御約束申し上げた間に、萬々一恢復の實を擧ぐることははずば、生きて再び故郷の地は踏むまじき覺悟を、氏神の前に誓うたのでござりまする、飯泉村の觀世音にも篤と祈願を籠めたでござりまする、斯う申しては恐れ多くもござりまするが、私櫻町へ參つた當時の有様、到底人の住む土地とは見えぬでござりました、鬼の目に人の姿映らば、まづ取り殺して、その血と膏とを吸はうとする、これは常のこと、怪むには足りませぬ、荆棘の道を拓かうとするには、その棘に皮膚を刺さるゝ、これも怪むには足りませぬ、亂れたるを引き締め、廢れたるを興すには、多少の困難苦痛ある

こと、是も覺悟の上でござりまする、私櫻町へ參つた後、今日に至る足掛五年、日として村中を見廻らぬこともござりませぬ、曾て一たびも温い飯に、温い汁を嘗めたこともござりませぬ、君命の重きを奉じて、百姓の心を安んずる、この爲には寢食を忘れたでござりまする、身の瘦をも覺えたでござりまする、最初には恩をもて懐け、中ほどには金銀米穀を恵み與へて、不良の百姓を善に導かうとしたでござりまする、なれど鬼の懐く時はなく、枯木に花を着ける望みも絶え、今は只誠實の心に由つて懐くべき者を懐け、化すべき者を化し、他は皆な自然の成行に任せ置くべき方法を取居りまする、されど私は根が百姓、神でも無く、物識でもござりませぬで、私の仕法のみを善く、人の仕法を非と申し立てる口は持ちませぬ、事業未だ半にも至らず、早くお役人衆の御訴訟に遭ひまする、これは私の不幸ばかりで無く、私如き者を御見出しなさせられた殿様御不幸と心得まする、所詮は私の不徳、今さら誰を恨むるやうはござりませぬ、苟くも分別ある者、物に臨んで仕法立を爲し得ぬはござりませぬ、三人衆は私仕法を非となされしまする、私は又私仕

法を可と致します、すれば議論の絶ゆる時もない、是非何れとも決し難ねます、由て私は早や覺悟極めてござります、速かに私の職分を解かせられて、これにある三人衆へ後役を仰せ付けござりませ、三人衆にも確とした御成案あらせられ、果して彼地再興と相成らば、私身に取ても此上の満足はござりませぬ、只速かにお役御免の儀、仰せ付けられ下さりませう」

火の如き熱誠は紅く燃ゆるばかりの唇を濡れ出づる、一座皆な感に打たれて黙然たり

「金次郎申しの口上、熱く聞きつらうの」

忠貞公は三人衆に膝を向けたまひぬ、三人は只私利を得んが爲めに、金次郎を被告として訴へしのみ、心に成算ありてにはあらず、又こゝに金次郎と對決して、御前に是非黑白を争ふに至るべしとも思ひ掛けねば、一同たゞ兩手をつきたるのみにて、兎角の答へだもあらざりき、殊に金次郎の今の熱烈なる辯疏を聞き、磐石に其脊を壓さるゝ如く、身を硬う、息を屏めて、見苦しきまでに畏縮みき

「金次郎は今聞く如く諄々と道理を述べ、相手方たるお身達、無言ではな

るまゝ」

御意は再び下る、正邪は面の色に顯はる、金次郎の顔は玉の如く心の光りに輝き、三人衆の眉の間は、黒き心雲の如くに棚引く

「金次郎の千萬言に對して、お身達一言の陳じも無い、こりや何ぢや喃、無實の讒口を構へて、金次郎を罪に貶さんとしたな」

「決して左様の……」

嘉兵衛が術なげに云ひ出でんとするを、公は詞強く壓へて

「何事も云ふな、善悪邪正は早や明瞭に分つてあるに……」

公の真意は金次郎を糺せんとするにあらざりして、三人衆の私曲を計かんとのお心なりき、三人衆をして再び金次郎仕法に非議を挿む餘地なからしむる爲め、この合詮義を爲されたるなりき、御聲鏡の如く高く響く

三人はハツと平伏す

(九)

忠真公の御顔には美はしき色浮び、忠真公の御眼には清しき光り雲の如く
濛ひぬ、金次郎は只御前に黙居たり、三人衆は平伏したるのみ蝸牛の如く居
縮む

「金次郎恕せ」と殿は湿く且つ親しき御聲「始めからそなたを疑うたでは無
い、正邪曲直問ふを待て後知るべきでも無い、されど一應の取調べも無く訴
訟を却下くるは、そなたに依怙最良する如く疑念する輩もあつて、諸事面倒
の起るべきを察し、多用繁雜のところを態々呼び招いた、悪う思ふな」

「私の心中、御賢察とござりまする、その一言に満足、何のお怨み申す處も
ござりませぬ」

「そなた遠慮、凡庸の知る處でない、硝子の中に容れた櫻の花はよく見ゆる
が、鐵の扉の中深く藏めた梅の香りは他に聞えぬ、小人は皆な扉の中の香
を聞き得ず、その姿の床しさを察し得ず、徒に揣摩憶測して、讒証中傷を事

とする、昔も今も變らぬ人情ぢや」と殿は金次郎の勞苦を慰める如く云ひ
「憎むべきは三人の役人ぢや、自ら揣らずして人を中傷、そなた遠慮のある
所を知らずして訴狀をさし出す、その罪正しく萬死に當る、以後の見せしめ、
きつと申付くることあるであらうぞ」

三人衆は生きたる心地も無かりき、大磐石に壓し付けられたる如く平太張
り伏しき、最初の勢ひもなく閉口せりき、息を屏め、肉を硬うして、わなわ
なと慄へながら口の中に神佛の御名を唱へき

「御懇の御情、人は己を知らるゝをもて、此上も無き歡びと致しまする、私
百姓の家に生れて、殿様お見出しに預り、四千石の仕法お引き受け申し上ぐ
るさへ、昔から聞きも及ばぬ立身とござりまするに、只今のお詞、骨に沁み
て辱く、御厚恩何日の世までも忘却は致しませぬ、然しこゝに一つのお願ひ、
お聞き入れ下さりませうか」と金次郎は恐るゝ様も無く云ふ

「そなた所望となれば、忠真身に替へても聞き届くる、何事ぢや」
「三人衆の罪過、御赦免とござりませ」

「や、何といふ……」

「私、年來の忠義に替へてのお願い、三人衆のお身に事無きやう、格別の御沙汰願ひ入るでござりまする」

昔は敵の本城に鹽を送りて、武士の美しき本性を發揮したるものあり、金次郎の此場の願ひ、正しく古人の義烈にも似たるよ、と殿は愈よ感嘆の膝を進めて

「そなた三人の罪を恕せといふか、改めて云ふ迄は無い、これの三人はそなた仕法に悪心を以て、そなた身の上を根本から覆さうとした痴漢ぢや、それでもまだ此等の罪を恕せと云ふな」

「三人衆の御訴状、決して讒言ではござりませぬ」

「斯程明白な訴訟、そなた面上に唾せられて、それでもまだその相手の袖に付く泥を拂うとするぢやませぬ」

「懼りながら三人衆お心に、私仕法の獻立御存じないでござりまする、己に獻立御存じ無し、料理鹽梅の善悪御存じあらする筈はござりませぬ」

其邊もあらう、ぢやが料理鹽梅知らぬとあつては、膳番の役が終まぬではないか」

「御存じなければこそ御疑念もおはしたれ、こゝに病む者あつて人參の根を咬ひとなされませ、その人參の何たるを知らぬ者側にあつて、その粗笨なる機を見たらんには、危み懼れてきと引き止むるに相違ござりませぬ、これその人を憎むにはあらで、その人を愛するでござりまする、三人衆の御訴訟も、要る所は私の仕法、百姓共身に取て、不利益の事あらうとの御配慮、民の憂ひとならんことを恐れさせたと、今一つは殿へ忠義をお竭しなされう真心と、この二の誠を置いて、御訴訟なされたに相違ござりませぬ、我君幸ひに三人衆御赦免、只今までの役義仰せ付けござりまするなりや、私も又始めに御約束申し上げた趣意に由つて、櫻町興復の任に當りまする、なれど萬々一、役義お召し上げ、御處刑仰せ付けらるゝ御處存ござりますれば、今日限り御暇を願ふ外ござりませぬ」

三人衆は金次郎のこの神の如き詞を聞きて、思はずも聲を擧げぬ、聲を擧

げて「おう〜」と泣き出しぬ、金次郎の心の花よりか美はしく、金次郎の
仁心の海よりも深きに感ぜしなりき、忠真公も亦聲を慄はせられて

「そなた心は玉ぢや、そなた如き健氣漢を、家人に持た幸福を誇とする」

「さらば御赦免をさりまするか」

「怒し難き者なれど、そなた仁心に免じて救す、これよ、それに在る三人よ」

三人は齊しく涙の顔を擡ぐる、慚愧の状は眉の間に歴々見ゆる

「今聞く通りぢや、そなた等三人が悪魔の如く罵つた金次郎は、そなた三人

の命を助くる神であつたぞ」

三人は遂に掌を合せて金次郎を拜みぬ、感謝の色は露の滴る如く落る涙の

中に盈ちて、云ふ聲はしどろもどろに慄ひぬ

「今といふ今、貴處御心の底が知れた、雪と炭とを見損じた三人、何んとも

お詫の申しやうも無い、平に御赦免をさりますせ」

金次郎は莞爾して

「その中には私の意中も見ゆる、此からは大きい眼を開いて、表面ばかりで

無く、裏面の裏面までを見させられ」

これ彼が面上に唾せられたる、挨拶なりき

されど讀者よ、その唾は金次郎を穢す泥にあらずして、金次郎に光りを添

ゆる露の玉なりき



英那吉

翁の道歌道俳 (二)

火の車造る大工はなけれどん

わのが作りてわのが乗りゆく

飯と汁木桶着物ぞ身を助く

その餘は我を責むるのみなり

第四章

(一)

忠貞公御前一坪ありて後、持田、大篠、赤松の三人衆は、金次郎に對する無二の謳歌者なりき、一たん其手を咬まんとしたる犬は、長へに金次郎の身を護る忠義兒なりき

再び櫻町へ歸りてよりは殆んど別人の如くになりつ

然もその頭領たるべき輪岡權太夫は、今も尚歌子の酌に酔ひてありき、偶に酒を廢する時ありても、彼の身に濕み込みし酒毒は、彼をして政治に口を容るゝ氣力無からしめき、彼は只活き居れるのみ、働き得べき人間にてはあらざりき

金次郎の仕法を片端より破壊せんとせし當の敵は、今や悉く手中の物となりて、羊の如く温順しき身となりしが、金次郎の仕法は其割に實行を見ること能はざりき、彼は従前の如く星を戴いて陣屋を出で、又星を戴いて陣屋へ

歸り、民俗を視察し、忠孝を奨励し、兼て荒地開發、風俗矯正の實を擧げんとしたれど、岸右衛門一派の百姓は、彼につけ是に付けて、反對邪魔の手段を取りぬ、岸右衛門一派のみにはあらず、金次郎の情に絶りて北國より移住せる百姓まで、時には有らぬ苦情を云ひ立て、金次郎の懷中を絞らんとする者すらありき

金次郎はこの頼みなき様を見て、つくづく事業の困難を感じぬ、肉は熔けて汗と流れ、血は湧いて涙と化し、骨も身も粉となるまで立ち働き勤め、君の爲め百姓の爲め、寢食を廢するまで心を盡せど、土中に埋もれたる玉よりも果敢なき身は絶えてその光りの世に現はるゝ時を無き、多くの人と、多くの入用とを費して拓きたる土地は、一二月の懈怠に由りて以前の草原と爲り果てつ、熱烈なる誠心と、熱烈なる愛情とに由りて、やゝ善處に導き得んとしたる百姓は、暫くする間に前の邪路に逆戻りして、有らゆる不良の徒に交る、一方に十歩を進めば、他方に十歩を退る、一方に十歩を出づれば、他方に亦十歩を入る、斯くして歲月を経る中には、心力も疲るべく、財力も

盡き果つべし

あはれ十年は夢の間のみ、十年を空に過して、この身尙荒蕪廢殘の地に立ちて、力なき夕陽に脊を射らるゝ事あらば、何の面目ありて忠貞公に謁し、又何の面目ありて先祖御代々の御墓に詣でん、我身のみは死しても終るべし、百姓の憂苦何日の時にか滅せん、忠貞公の御心何時の日にか安からん

今は人間の力のある限りを盡しぬ、然も三ヶ村の現状は此の如し

此上は神の力に借る外無し、神の力を借りて此大業を爲し遂ぐべき外は無し、假しわれ真心の眞を披きて、成田不動明王を祈らん、三七日の斷食、三七日の生命ある祈願、斯くして神の示現を得ば、我志望は立どころに達し得ん、不幸にして示現を蒙ることを得ず、三七日の斷食と、三七日の祈願とに堪へ得ずして、空しく御堂の鬼とならば、我等運命もそれまでなり、一片の至誠、幸ひに神に通せば、この一大難事蓋しさのみの苦痛なくして成就せん、成否只神にあり、運命只天にあり、今より成田の御前に參籠せんかな、秋も早や暮れんとして、萬木凋落、野にも山にも蕭條の氣の滿ち渡る頃な

りき、雨いたく降り、風いたく吹きて、黒白だも分かぬ夜、金次郎は妻の歌子にのみ、心願ありて成田不動明王に参詣する旨を云ひ置き、身には木綿の衣服、敷れたる袴、それに蠟色袴の大小横へ、箆笠に身を堅めて飄然と陣屋を出でき

一四〇

歌子は涙の目を睨りて、人知れず門口まで見送りぬ、天地蒙晦、金次郎夫婦の真心は雨となつて草木を洗ひ、風となつて腐れたる人心を拂ひ盡さんとす

(二)

「恕せよ」と應揚に詞を掛けて、成田の町の中程に、古き暖簾香しき補屋といふ旅人宿の敷居を跨ぎたる男あり、雨は名残もなく晴れたるに、箆を着て、片手に菅笠を携へたり、身の高さは六尺に餘るべく、ふっくりと肥えて色くまで黒さが、眼光炯々と人を射る、その様の例ならぬに、手代は結界の中より躍り出て

「これはお早いお着きでござります、まづ奥の間へ御案内、これよ御洗足を参らせぬか」と下にも置かぬ待遇なりき

下女共二三人ばらばらと立ち出で、洗足の湯を運ぶもの、草鞋の紐を釋く者、うしろより箆を脱がす者、實に痒き處へ手の届く如し、手代は絶えず前に立ちて、何かと指圖を爲し居たるが、ひらりと箆を脱ぐを見れば、下には垢染みたる木綿布子、敷れたる紺の脚絆、佩刀の角鋤さらさらと光るのみ、さして身分ある人とも見えず、手代は案の相違したるが、客は委細頓着なく、徐に足を洗ひ終りて、表へたる如き手拭の端に拭ひ終り

「座敷は何方ぢや」と廊下の中央に突立ちぬ、下婢は心得て前に立つ、客は一刀提げて背後より悠々と歩む、其風姿いかにしても不思議なり、手代は幾度か首を傾けつゝ、その身も續いて後に従ふ

下女はこの異き客を見晴し好き八疊の間に案内しぬ、客は座に就きて、眼を縁外の景色に放つに、昨夕の雨に色付きたる庭の紅葉は、燦然と霜に飽き、真垣の蔭に咲き匂ふ菊の花は、美しき夕陽を受けて八千歳の延命の色深

一四一

し、この風光に一息安ひる猶豫も無く、手代は襖を徐に開きて、まづ白睡勝の目を客の頭に浴せ掛けぬ、客は此方を振り向き

「甚う雑作を掛ける、然し構ひ呉れるには及ばぬぞ」

「旦那様、やはり不動尊御参詣でござりまするか喃」

「心願の筋あつて参詣に参つた、相變らず御繁昌の御様子ぢやのう」

「御當所ばかりは別でござります、相州の大山寺、武蔵の高幡寺、この新勝寺の三ヶ所を坂東の三霊場と申します」と云ふ中も客の様に油断無く、武士

かと思れば武士らしくもあり、百姓かと思れば百姓らしき點もある、詞はい

かにも横柄にして、風俗はいかにも寔れ果て居る、この不思議の客人の性態

を讀まんとする、眼ざし銀かりき、息づかひ急なりき

「旦那は何れからお越しでござりまするか」

「今日は櫻町から参つた」

「御生國は何れでござりまするか」と手代は少しも緩めず「念の爲めに伺ひ

まする、御住所御姓名總てお聞かせを願ひまする」

拙者相州小田原の家中、名を二宮金次郎といふ、少々心願の事あつて三七日の間断食、不動明王御堂にお籠りを致さうと存ずる

三七日断食の荒行をするを聞いて、手代は思はず眼を圓うしぬ

「あなた断食を爲されますか」

「人間誠心さへあれば、食事などは致さずとも、立派に命を續けることが爲

らうと思ふ、その間は何かと雑作を掛けるであらう、萬事を頼むぞ」と云ひ

ながら懐中より一包みの金子を取り出し「これに金子が七十兩ある、當座の雜

用に渡し置く」

「七十兩——七十兩でござりまするか」

「不足あれば追て取寄せる、これは眞の當座の入用ぢや」

拵つきたる木綿の布子、敷れたる紺の脚絆、三七日断食せる宿代の手付と

して、七十兩の大金を預け置かんと云ふは、愈よ容易ならぬ客なり、或は強

盗、或は大罪を犯して逃走せる者、天下大老職の御家人と偽りて、一時の踪

跡を暗まさん謀計かも知れじ、斯る異しき客を泊めて、後日の難義を惹き起

す事ありては爲るまじ、今の間に謝絶して災害の根を絶つに如かじと、早く心に思ひ決めたれば、七十兩の金子に眼も呉れず押し戻して、それと共に三尺餘り身を進めぬ

金次郎は自若たり

(三)

「え、實にその……」と手代は云ひ難さうに頭を掻きて「……斯様な事申し上げ、お氣に障つては爲りませぬが、只今までつい失念、あなた様お詞を承はつて、不圖思ひ出した事ござります、實は江戸不動講の御連中、今日晡時、この地お着、私方へも二三人御同宿なさるべき手都合、座敷の都合萬端を承知しながら、女共これへ御案内申し上げたは、何とも申解のない落度お詫は私から致しまする、宿は手前共一軒でなく、この前頭に大和屋と申すもござります、又河内屋と申すもござります、何れも手廣、殊には萬事に行き届き、何かと御便宜あるやうに心得まする、何卒……」

「え、黙れ、左様な事……」

「私方御最良とあつて、御止宿下し置かれませする段、幾重にも有難い仕合せではござりまするが、只今も申し上げるやうの……」

「え、黙れと申せば黙れ」と大喝せし聲百雷の一時に落ち来るが如く物凄く「今となつて断るほどなら、何故も少し前に断らぬ、拙者姓名は前ほど具に申し聞ける、心願あつて三七日の間雜作に爲らうといふ、この詞を迂散に思ふか、拙者身分に疑惑を挟むか」

「全く左様ではござりませぬが……」と手代は思はず硬うなりて「……實申し上げる通りの……」

「それなら其客を断れ、一たん引き受けた事を、理も無く變換へ致す法は無し」

また睨みたる眼の鋭さに胸を射られて、手代は返す詞も無くさし垂頭く「三七日の間斷食、時には水垢離を探る事もあり、又護摩を焼く事もある、由て清淨を専一、女子共に出入をさせぬやう心付けて呉れねばならぬぞ」

手代は困じ果てたる顔を擡げて

「委細心得てはござりまするが、一應は主人にも申し傳へ、何れとも御返事申し上げるでござりまする」と云ひ捨て、逃げるが如く座を滑りぬ、彼は金次郎を疑ふこと深く、金次郎を異むこと一方ならず、店の間へ歸ると共に、直に出入の者を招きて、急行江戸へ赴くべき旨を命じぬ、そは小田原公御屋敷にきて、御家中に二宮金次郎と云ふ者あるか無きか、有らばその身分は如何、その風姿は如何、三七日断食して、深く信心を抽んでるといふ、その舉動いかにも不審なり、泊り置きても仔細なかるべきか、それ等の事残る處なく取調べ來れとの内意なり

手代は一方江戸へ急使を派して、一方金次郎の動靜に注視しぬ、金次郎は果して一粒の飯だも食はざりき、一盃の酒をだも飲まざりき、然もその夜より清水を頭より浴びて、心と身とを清めつゝ、一心に不動明王を祈誓する、幾十百とも限り無き燈明は心の火に輝き、空を焦して舞ひ上る護摩の煙は、信仰の念を押し包みて、ひら〜と御堂の内外に蔓る、老若男女貴賤上下皆

一様に手を拍ち印を結びて、夜も晝も参籠祈願する中に交り、金次郎も又熱誠をもて信心し奉る、多くの信者は如何なる事を祈念し居れるか知らず、彼は念々只櫻町衰頽回復の實を擧げんことを冀ふなり、四千石の百姓一日も早くその業に安んずべき日あるを冀ふなり、小田原公御信任の旨に添へて、早く事業の緒に就かんことを冀へるなり

萬々一この志望成し遂ぐべき機會なくば、速かに金次郎の命を召し給ふべしとなりき、三七日の断食に心瘦せて、再び起ち難き運命に陥いらせたまふべしとなりき

(四)

楠屋手代よりさし出したる飛脚は一日隔て、喘ぎ〜歸り來りぬ

「御心配は要りませぬ、二宮金次郎様は大久保様御内に、一人あつて二人無いお役人と申す事でござります、金次郎成田山へ参詣するは、容易ならざる願望あるに相違無し、急ぎ御家老へ申し上げよ、何かの御手當あるかも知れ

ぬにと、御家中は大した混雑でござりました
これ飛脚の復命なりき、金次郎に對する旅舎の待遇は當日より一變したれど、金次郎はその待遇を心に受くべき餘裕もなく、日ごと夜ごと新勝寺不動堂に閉ぢ籠りぬ

櫻町陣屋及び櫻町六ヶ村の名主年寄百姓の多くは、忽如として金次郎の姿を潜せしに驚き、八方に人を出して、その所在を搜索したれど絶えて行方は知れざりき、今まで金次郎の仕法に反對したる者まで、金次郎の行方不明となりしに就いては、容易ならぬ珍事として、只管心を痛めたりき、そは金次郎が小田原公お見出の役人とありて、特に此地へ派遣せられし重要な人物なるを知ればなりき、その重要な人物を失ひては小田原公に對して辯解なしと思へばなりき、金次郎が忽然姿を潜せしは、三ヶ村百姓の大部分が金次郎の仕法に道理なき反抗の態度を取りて、何事にも服従せぬ結果なりとのお咎めあらば何として申し開きすべきかを、恐れ危み苦勞すればなりき
されど幾日経ちても行方知れざりき、幾日経ちても巴鼻なかりき、神なら

ぬ身は金次郎が成田不動明王に三七日の祈願を籠めて、斷食參籠し居らんとは、流石に思ひ付かざりき、中にも心配苦勞の胸を抱きたるは、前の日の敵たりし赤松、大篠、持田の三人衆なり、斯くまでにして行方を探るも巴鼻なく、今日に至るまで一片の消息さへ下さらぬは、愈よ櫻町の恢復覺束なきを見極めて、何れかへ姿を潜されしものならん、今は止むを得ず、いかに重きお咎めを受けんとも、いつまで打ち捨て置かるべきにあらず、兎も角もまづ江戸お屋敷へ申し上げんとて、一伍一什を書面に認め、人して江戸上邸へ届け出でぬ
金次郎が成田山へ參詣せし由を知りしは、この使者が櫻町へ歸りたる時なりき、さらば急ぎ御迎ひを參らせでは協ふまじ、誰が好かるべき、彼が可かるべき、評議は忽ち陣屋の一室に開かれぬ
「小路甚吉、お身は行かぬか、お身は先生お氣に入つて居る」
小路甚吉は年若き下役人なり、嘉兵衛に斯く云はれて、忽ち頭を左右に振りぬ

「いえ、私共では協ひませぬ、先生定めて御立腹、容易の事では御歸りもあ
るまいと心得まする」

「實に爾うぢや」と代藏は頷いて「私もそれを懸念する、先生お歸りのない
時は、櫻町四千石日の光りを失ふも同様ぢや」

「然し捨て置いては相成らぬが」と伊助は肩を揺めながら「何んとしたもの
であらうなア」

「寧ろ一同が成田山へ罷り出で、先生御前に平伏して、今日までの不調法を
真心からお詫びするか」と嘉兵衛は一座を見廻し「それならお許しのない事
もあらず」

「ぢやがお詫ばかりでは協ひませぬ、向後先生の御主意を奉じて、何事にも
故障を云はぬといふ一通でもさし入れるかな」と代藏は再び云ふ

「其邊は何れにも、先生思し召しに協ふやう致すが、然し物井村には岸右衛
門が居る、作兵衛勘十豊作の手合が居る、折角お歸りを願うても、再び先生
を怒らせることあるまいかな」と嘉兵衛は遲疑したりき

「其處が危い」と代藏は吐息の下から「いつそ此へ岸右衛門一味の輩を呼び
寄せ、篤と説諭してはどうあらうな」

「これは上策、さらば萬兵衛」と末座にある百姓を呼び「お身呼んで来てく
れまいか」

萬兵衛は正直無二の百姓なり、心得て駆け出す、木見川の土手に夕暮寒く
時雨して、落葉を誘ふ風の音物淋し

(五)

その夜評議の結果として、金次郎迎への爲め成田山へ來りたるは、百姓に
て萬兵衛、善兵衛、惣兵衛の三人、下役人にて小路甚作、何れも天の巖戸に
隠れさせし日の神を御迎への心なりき、まづ楠屋へ入りて、金次郎の模様を
問ふ、この應接に出でたるは例の手代なり

「當家に大久保相模守様御内、二宮金次郎先生御止宿の筈ぢや、相違ないか」
甚作は丁寧に問ひ掛けぬ、手代は内庭に蹲りたるまゝ、畏りて

「二宮様御止宿でござりまする」
 「野州櫻町陣屋の者、お迎へに罷り越したる旨、執次頼む」と甚作は再び云ひつゝ、「而て只今御在宿か」
 「宿には在らせられませぬ」と手代は揉手しつゝ、「不動尊御堂に御籠らせでござりまする」

「御参詣か」と甚作は事も無げに「さらば夫へ参る」

「ま、お待ちなされませ、二宮様は今日で恰ど二十一日、御飯一粒も食べさせられで、一心不乱の御祈禱、あなた方お越しでござりませうとも、御對面はあるまいと存じます」

彼は斯く語る間も、鬼氣自然胸に迫るを覺ゆる如し、萬兵衛は思はず進みて

「お手代衆へ尋ねます、二宮先生御飯一粒も食べさせられぬとは、當地御到着此來斷食の業を爲させられるでござりまするか」

「如何やうに申し上げても、箸を取らせられた事ござりませぬ、それに朝夕、

頭から冷水を御浴び、御心を清めさせて後、尊前に御籠りなされるのでござりまする」

「除程深い御心願があると見えませす」と萬兵衛は吐息つく

「諸國より御参詣のお方も深山にござりまする、又斷食水行、さぞくの手段をもて、御利益を受けうと爲させられる御方、例ある事ではござりませぬが、二宮様ほどの強い御信仰を見たことはござりませぬ、御眼の光り、御顔の色、それに久しう取り上げもなさせられぬ御髪は亂れて、護摩の烟に煤けた頬の上にかゝる、その様二目とは見られぬ、物凄さでござりまする」

甚作も六人の百姓も宛ら身毛の戦慄つやうに覺えて、詞はなく顔見合す
 「でござりまするゆゑ、只今御堂へ御尋ねでござりまして、容易に御對面はあるまじく察しられます」

「困つたのう」と甚作は三人を見返つて「暫くこれにお待ち申さうか」

「さりとて限の無い事でござります」と萬兵衛は考へ「あなた様はなりませぬ、けれど私共は百姓、物の道理を辨へぬが當然でござります、由てお叱り

を承知の上で、そつと御様子を見て参りませうかな

「左様ぢやのう、日頃お氣に入りのお身達ゆゑ存外快くお逢ひなされるまいものでもなす」

「どうぢや惣兵衛どの、善兵衛どのも一所に、御様子を見て來うで無いか」
「甚うお叱りはあるまいか」

「それは覺悟ぢや、假しお叱りは蒙つても、村の爲めと思へばそれで終ひ、二十一日——あア二十一日とお云ひなされたな」と萬兵衛は何事かに思ひ當りし如く問ひ返す

「今日で二十一日になります、その間の御斷食とても尋常一様で成さる理はござりませぬ」と手代は金次郎の事を語ることに、自然襟を正す様なり、萬兵衛は手を拍ち

「大丈夫ぢや、きとお目に掛れる、今日は三七日の満願、もう御祈禱も終つて居やうぞ」

「いかさま三七二十一日」と甚作も心付き「こりや好い處へ氣が付いた」

「幸先可しぢや、善兵衛どの惣兵衛どのさアござれ」と萬兵衛は前に立つ

(六)

今日にて三七日の願満つ、金次郎は昨夕より不動明王尊前に兀坐して、例の願望、例の祈念を繰り返し、火の如く顯著なる示現を冀ひてありしが、精力他に超えたる身も、三七日の心勞一時に襲ひ來りて、眠るとも無く夢に入りぬ、現にもあらず、幻にもあらず、うつゝとして坐眠れる目前に、何物とも知れず赫灼と光りを放つものあり、金次郎驚いて見れば、白き火、紅き火、蒼き火に包まれたる一口の劔、宛ら中有に漂ふが如く、東西南北して金次郎の頭の上を飛び廻る、劔の尖端には一顆の寶珠あり、寶珠の周圍には紫色せる小さき鳥無數に翔けりて、その美しき寶を護るが如く見ゆ、是果して不動明王の示現か、是果して金次郎の大願成就を知らせたまふ不動明王の御威徳か

金次郎はこの不思議の現象を見て、あまりの有難さ尊さに仰向いても見ず、

尊前に平伏して一心に明王の御名を唱へぬ、金次郎が明王の御名を唱へることに、寶珠の光りは一段加はりて二段加はりて、遂には五色の光に裏せられぬ、五色の光に裏せられたる寶珠の中には、宛然明王の御靈納まり居れる如くぞ見えし、轉々と頰がりて金次郎の手の上に落ち來る、金次郎は嬉しく兩手に受けて押し戴く、此時耳根に不思議の聲ありて

「夜光の珠は尊けれど、それを食ひて俄を凌ぐことはならぬ、正義は人間の至誠なれど、民を懐くる術では無い、正義に仁愛を交へよ、仁愛は至誠の花、花を見て美しく感ぜぬものは無いに……」

虚空より響くにもあらず、地底より起るにもあらず、明王を包む烈々たる火焰が、受れ合うて出る音にもあらず、明王の手にある御劍の氣子より流れ出づる聲にもあらず、正しく今金次郎の手の中に轉々し來りし寶珠の何れよりか、この尊き聲を出すなりき

これ果して明王の示現なるべきか、夜光の玉は貴けれど、食ふべきものにあらず、正義は人間の至誠なれど、これを以て民を懐けんこと難し、仁愛は

誠の花なり、花をもて人の心を柔げよと告げられし詞、果して明王の示現なるべきか

金次郎は夢現の境をも辨へざりき、金次郎は更に明王の尊前に平伏して示現の要を問ひ返さんとしぬ、然も手中の寶珠は紫の光を放ちて、目も眩むばかりに燦然と輝きぬ、金次郎は聲を揚げて、明王の御名を唱へんとしぬ、その聲に我から驚きて、不圖目を開く時

「旦那様々々」と呼ぶ聲す

金次郎は身を起しぬ、身を起してきよとくと四邊を見ぬ、まづ目に映りしは萬兵衛なり、萬兵衛の背後には善兵衛惣兵衛心配の色を泛べて、悄然と蹲りぬ、御堂の燈明は赫灼として三人の顔を照らす、金次郎は茫然たり

「旦那様、萬兵衛でござります」

「善兵衛惣兵衛でござります」と三人が口を揃へて「小路様同道、お迎へに参つてござります」

「お、」と金次郎は漸く我に返つて「此頃からの疲勞うとくと寐たと見ゆ

る

「轉寐を遊ばしたやうでござりました」

「さうあらう」と云ふ中も、今の示現に明王の感應ありたる如く嬉しく「お身達迎へに來たか」

「大篠様、赤松様、持田様皆な甚う御心配でござりまする」

「私がこれへ参り居ること、お身達どうして知つたかの」

「江戸お屋敷でお聞き申したのでござりまする」

「は、江戸のお屋敷で……、すると早や誰か内通したと見ゆる」

「承はれば三七日御断食、一心に御祈願あらせられた氣でござりまする」と萬兵衛は恐るゝ「何の御心願あらせただのでござりまする」

「それをお前方に云ふやうは無い」と金次郎は例に變らず「今日で満願ぢや」

「旦那様御満願の日に、私共お迎へに参つたといふも、不思議の御縁でござりまする」

「真に明王のお紹介と見ゆる、小路甚作も参り居るか」

「お宿許にお待ち受け申して居られまする」

「何れも大儀ぢや」

「もうお歸りござりませうな、旦那様お姿が見えませぬで、村中の者皆な心配、恰で暗夜に燈火を失うたやうに申し居ります」と善兵衛は色黒き顔を擦りぬ

「旦那様お在の時は、四の五の苦情申した者もござりまするが、お行方知れぬと聞いて、誰一人嘆き悲まぬものもござりませぬ」と萬兵衛は村人の思慮なきを嘲るやうに、「燈火の必ず在る筈と油断する者は、時に暗黒で鼻を撲つことがござりまする」

「は、と」と金次郎は快げに笑ひて「少しは後悔致し居るぢやの」

「いやも、村中一統、泣かぬばかりの有様でござりまする」と惣兵衛は膝を進めて「強情の岸右衛門でさへ、陣屋へ参つて、降参の手を突いたのでござりまする」

「岸右衛門も目を覺ましたか」

「随分長い夢でござりました」と萬兵衛は他の二人に代つて、其處で村一統の御願ひ、向後旦那様御仕法に付き、指一本さすことは致しませぬ、今一度御歸り下さりませるやう、只管御願ひ申し上げるでござります」

「諾し、村中が頼みぢやな」

「平に御願ひ申しまする」

「それならば歸る」

「御歸り下さりまするか」と萬兵衛は勇み立ち「旦那様、お歸り下さる氣ぢや、早う小路様へお知らせ下さりませ」

「然し、三七日の御断食、さぞ御疲れござりませう」と惣兵衛は右より、善兵衛は左より、金次郎の肩に手を掛けて「私の手へお捉りなされませ」

「え」と金次郎は其處にある杖を振り上げ「一月足らずの断食、斯程の事があらう、そこを退け、この手を放せ」と云ひさま、手にせる杖を振り上げて、びしやりくと打ちすゑぬ

「こりや旦那様」と三人は憫れ果て「お疲れはござりませぬかな」

「此通りぢや、ちとも疲れぬ」

「颯然と起ち上つて、悠然と歩みを運ぶ、其様三七日の久しき間、食を絶ちたる者とは見えぬ、足下も確に、氣力に些の衰へもあらざりき」

(七)

「今日は二宮の旦那様お歸りぢや、村盡處までお出迎へ申さうでないか」と日の暮れるをも待ち難ねて、彼方此方を説き廻るは音藏なり

音藏と同じやうの運命に落ち、音藏と同じやうの窮境に立ち、更に音藏と同じやうの救助を得たるもの、三ヶ村を通じてその數幾許なるを知らず、心には深く金次郎の仁恵を徳としながら、肝腎の代官所役人に、金次郎の仕法を破壊せんとするもの多きを見て金次郎を褒むるは代官所役人を輕蔑するが如くに思はるゝ形跡あるを見、表面には禮の一言も云ひ得ず、裏面にのみ恩を感じ居たる人々は、皆な音藏に催促せられ、代官所役人も近來漸く金次郎の徳に懐きたる様あるに心を安んじ、我もくと尾き來りて、音藏を發頭と

せる出迎ひの人数、殆んど百人近くにもなりつ、中には金次郎を徳とするにもあらず、金次郎の恩を着るにもあらず、人々が出迎ひに行くと云ふを聞き、物好に仲間入せるも多くありて、道の側には出迎ひの老若男女、宛ら人の垣を作りたり

「何の御心願がおありなされたのかは知らぬが、今日惣兵衛殿歸られての噂を聞くと、三七日の間一粒の飯も食べず、断食してお在でなされたさうぢや、一日食はいでも眩暈を覺ゆるが常ぢやに、二十日も二十一日もよう我慢されたものぢやの」と一人の老翁は驚きたる如に云ふ

「流石は二宮の旦那様、御辛抱がお強い、そんな事ではとてもお歩きなさることも能きまいのう」と側の一人も口を添へる

「云ふまでもない事、三七日断食すれば、満願の日は半死半生、お粥の柔いので食べて、七日八日養生をせぬと、到底以前の身體にはなれぬものぢや」「爾らあらうのう、それに二宮様は昨日が満願、今日此方へお歸りなると云ふのぢやよつて、お轎子か、それとも吊臺か、さぞお疲れで在らせられう

の

「成田からは二十里、遠者な者でも一日路には些と巾る、それに断食をなされた後、假し、轎子にした處が、どうせ夜半に爲らうぞよ」

「夜半まで待つのも大儀ぢや、一度出直しては何うであらう」「兎角する中、日も暮れる、小路様もお越しぢや、やがて便りも知れるであらうに、もう少し待たつしやれいの」

曰く是、曰く彼、幾十人の出迎人は、宛ら雀の轉づる如く露々す、此間には金次郎仕法に服せぬもの、金次郎深意を誤解するもの、際立ちて妨げをするほどならぬど、栢山の百姓が何を爲やうぞ、と高を括りて餘所々々しく爲し居れる者、水に油の交る如く交りたり

「お前達お出迎ひに来て下されたか、さてく大儀、今それへお歸りぢや」息を切て駆け付けしは、前供の善兵衛なり、夕陽は西に沈みたれど、鈍き光りは尙残りて、力なく蒨穂の稻の上を照らす、葉は落ちて枯木の如くなりし樹の枝に鴉の三つ二つ羽を休めたるも淋しげなり

「え」と音蔵は驚きて「旦那様もうお着きぢやのう」
 「今それへお越しなさるゝ、一同不禮があつてはならぬ、随分優和しくお迎へ申すやうと、小路様お心付けぢや」
 一同は道の側に蹲る、音蔵は不審の眉を動かしながら「旦那様は三七日御断食を爲されたさうぢやの」
 「何か心願の事あつて、三七日御断食、昨日の満願に私等が迎ひに参つたも、全く不動明王の御手引き、不思議な事ぢや」
 「さぞお疲れであらうわの」
 「處が一向お疲れの様もない、私も萬兵衛殿も、旦那様お腰は起つまいと見極め、御堂でお手を取らうとして、二ツ三ツ打擲せられた、殊の外の御元氣昨日お粥を少しばかり召喫つたが、今朝は寅時にお目覺め、二十里からの道程を何んの苦もなく歩かせられた、恰で神の所業ぢやの」
 「これ何と云はつしやる」と音蔵を始め並み居る人々目を睨つて「お橋子にもお乗りなされいで喃」

「お、小路様それをお勧めなされて、甚うお叱りをお受けなされた、いやと恐れ入つたお方、到底尋常の人間では無い、お身から御光が映すやうぢや」
 善兵衛は宛ら神を語るが如く、詞に尊敬の思を籠めぬ、三七日断食、粥少少を喫りたるのみにて、二十里に餘る道を歩行せん事、如何にしても神業なり、百姓より起つて天下大老職のお見出しに預り、四千石の衰亡恢復の御委任を受けらるゝ、學者でもなく智者でも無く、さりとして又系圖正しい家柄でも無く、只一片の至誠、よく廢れたるを興したまふ、彼のお方の爲さるゝ事、物として成就せぬはなきも、そのお心に誠の一字が籠ればなり、誠の力は神に通ずる、誠を離れて神も無く佛も無し、三七日の断食に御疲れもなさせられず、迎ひの者と共に徒歩して、二十里の道を歸りたまふは、正しく人間に例の無き事、正しく神と同様の通力を持たせたまふなり、神を敬ふは人の常、佛に事うるも又人の務、神佛を疎略にすれば、冥罰立ちどころに身に中る、今までその心も付かず、二宮様を疎にしたる恐しさよ、と一同は戰慄ひしぬ、されど其間には多少の疑念を抱き居らぬもの無きにあらず、ずつと出て

「善兵衛殿、真個かいの」

(八)

尙半信半疑の様に問ひ掛くる、その詞の終らぬ中に、金次郎は小路甚作を前に、萬兵衛を後に、二三人の小厠を従へて、悠然と歩み來る、今山の端に沈まんとせし夕陽の光りは、燦としてその明星の眼を照らす

「何れも大儀ぢやのう」

流石に頬の肉は落ちたれど、聲の調子に力あり、いかさま太き眉、廣き額、高き鼻に御光ありて、宛ら人を射る如くにも見ゆ、この不思議の状態を目前に見たるなれば、人々は思はずも大地に平伏して

「お歸りなされませ、御無事にお歸りなされませ」と口を揃へぬ

金次郎は歩を止めて其様を沈と見おろしぬ、今迄に例無き誠心、霞の如く村人の上に影さして、平伏したる頭の上に尊敬の念雲の様に棚引くを感じたる時、嬉しさ餘りて不動明王の御名を唱うるを禁じ得ざりき、今までも金

次郎の仕法に随喜せる一部の人の誠心は認め居りぬ、されど今日の如く親しく美はしき心の發現を見たる事はあらずき、口頭ばかりの追従を聞きたることはあり、されど今日の如く真心より出でたる挨拶の聲を聞きたることはあらずき

金次郎は炯々と輝く目に、歎び涙を濕ませて

「さて大儀、出迎ひに來て下されたか」

「御無事のお顔を見て、此様に嬉しい事ござりませぬ」

「私もお前達の悪い様を見て、一時に疲勞を忘れたやうぢや、今日は心祝ひの事もある、赤飯でも炊いて進ぜう、陣屋へ來せられ」

「有難うござります、今までの不調法、今まで旦那様を粗末にしたのは、全く私共の心得違ひでござります、是からはもう如何やうな事ござりませうとも、旦那様のお詞に背く事は致しませぬ、どうぞ何處へもお越しなされずに居て下さりませ、お願ひでござります」

「何處へ行かうぞ、お前方を捨て、何處へ行かうぞ、私は此處に根をおろし

て居る、根を抜いては樹が枯れやう、樹が枯れては土の用も立たぬ、不躰ぢやが私はお前方を我子同様に思うて居る」

「私共見たやうな者を、勿體ない、子と思ふとの仰せぢや、これ皆の衆よ、旦那様は三ヶ村の親神様ぢやぞや」と誰言ふとなき聲は聞こえぬ、續いては異口同音に、「有難うござりますす〜」と合掌の中より云ふ

金次郎は三七日の祈願が、斯ほど文でに御利益あらんとは思はざりき、村人の多くは真心を披きて服従し始めしなり、濁れる水は澄み來らんとす、月に掛る村雲は晴れ行かんとす、幾年間の丹精は漸くにして美しき芽を生さぬ

金次郎の歩は一入輕かりき

「小路どの、皆を伴れて下され、何もないが陣屋には酒がある」

「二宮先生思し召しぢや、仇に思うてはならぬ、一同がお供をせぬか」

「有難うござりますす〜」

「禮を云ふばかりではならぬ、萬兵衛、善兵衛、お身達二人が後に残つて宰領するぢや」

「心得てござりますす」

二人は晴々せし聲なりき

此間に金次郎は早や一町ほども歩ひ、日は名残無く暮れて、陣屋の門前には提灯白日の如くに輝く、赤松、大篠、持田の三人發頭して、金次郎歸りを待ち受くるなり

至る處に雨晴れて、至る處に月の輝けるを見る、金次郎は夢に夢見る心なりき、玉の輿に乗りて彩霞の中を行くが如き感ありき

(九)

「お父様、お父様」

蝗の如く駆け來りて、金次郎の胸に縋り付くは彌太郎なり、黒瞳勝の目を舉げて、懐しげに顔を見入る

「お歸り遊ばしませ、甚うお早うござりますす」

玄關の式臺に手を突きて、徐に出迎へるは歌子なり、光澤好き髪を抑へ髪

にして、張の好き目に嬉しさは輝き渡る

「彌太郎か、お」と金次郎は膝の上へ抱き付くを片手に抱へて「お歌今歸りました」

「さぞお疲れござりませう」と云ひながら金次郎の草鞋の紐を釋く

「お父様々々」と彌太郎は覗き込みて「お土産を下さりませ」

「今取らせる、左様に申すな」

泥に穢れたる足袋脚絆を脱ぐ中に、惣兵衛は洗足の湯を持ち来る、金次郎は足洗ひ身を清めて、悠然と奥の間に入れば、床の間には天照皇大神宮の掛軸、白木の三寶に神酒を供へしは、良人の無事を祈る歌子の心盡しと見えて懐し

金次郎はまづ床の間に對ひて御拜、やがて此方を振り向く時、歌子は湯呑茶碗に葛湯して持ち来る

「お湯の代りでござります、まづ一つ召させませ」

「さうか」と金次郎は手に受けて「好い加減ぢや、物はこの好い加減が難し

い、過ぎてても爲らず、足りないでは尙爲らず」と獨語のやうに云ひ「百姓共大勢參つて居る、何れも私の歸りを出迎へて呉れたものぢや、赤飯の用意しての」

「只今膳拵へして居ります」

「よく氣が付いた、さて不在中、何んの變ることも無いの」

「いやある、こゝに一つ變り果てた物があるよ」と云ふ聲次の間に聞こえて間の襖を徐に開くは、見違へるまでも酒太りせし權太夫なり

「や、鞠御殿、こりや珍らしい」と金次郎は坐を譲つて「まづ、入らせられ」

「今お歸りか、この四五日首を長くして貴公お歸りを待つてあつた、挨拶は後です、赦させられ」と權太夫は膝行り入る「扱早や、此處で貴殿お目に掛るも面目無い、拙者年來の不心得、何ともお詫の致しやうも無い、實は貴殿お留守中、お歌どのから懇々と仁義の道を説き聞かせられ、長夜の眠り始めて覺めて、全然心を入れ更へる、承はれば拙者引き籠り中、下役共申し合せ、貴殿仕法を悪ざまに御訴訟申し上げたといふ、言語同断怨し難い事」

「それも皆私の不徳から起る、人を恨むやうは決してござらぬ」
 「さ、其お心が神ぢや、下役共訴訟はお取上げにも爲らず其まゝ却下、お調
 べの末、却て彼等悪心の段々露見、重きお處刑にも爲らうとしたを、貴殿身
 に替へて御赦免を願はれた氣、徳孤ならず、下役共も前非後悔、今では貴殿
 手足となつて、仕法の助けを致し居るさうぢや、拙者それを聞いて彌よ耻ぢ
 入る、長の年月、お歌どのお待遇、酒下物御持參下さるを好い事にして、來
 る日もく酔ひしれ、村の事、役義の事、皆な上の空で暮らいたが、今日と
 いふ今日、始めて本心に立ち返つた、以來は貴殿仕法に加擔、及ばずながら
 専心に立ち働く、從來の權太夫とは思はれず、お心置きなくお付合ひのほど
 願ひ入る」と後悔面に現はれぬ

「歸宅匆匆嬉しい御挨拶承はる、貴殿一人の御同心を得るは、櫻町三ヶ村の
 百姓全體を味方に入れしも同然、此上の歡びはござらぬ、この程までは私の
 仕法に疑ひを挟んで、彼の是のと難題を云ひ掛けた百姓も、今村境まで出迎
 へて、他意なき旨を云うてくれた、雲も晴れ、霧も晴るゝ、當地の興隆さつ

と成る、さてく芽出度い、祝ひの證據ぢや、お歌一獻參らせぬか」
 「いや」と權太夫は手を掉て、「酒は無用、夢と共に酒の酔も醒めた、こ
 れからは二宮先生門人となつて、仁義道德の仲間入をする、その始めから酒
 を呑むは本意でない、平に廢さつしやれ」と例になく眞面目なり

「鶴伺殿」と金次郎は膝を突いて「御本心かの」
 「神々も御照覽、只今の詞、毫ほども偽りはござらぬのぢや」
 「それは千萬有難い、今の御口上承はつて深く安堵、貴殿御同意を得る上は
 何んの躊躇も無い、明日からは頻りに仕法に取り掛る、御存じの通り三幣彈
 正は歸國、横山周平は病死、只今は眞の一本立ち、貴殿お力を借る事になれ
 ば、萬事が抄取り、五年の物は二年で成功、二年の者は半年で仕上る、平に
 頼む」

月は愈よ晴れぬ、徳の光り至らぬ隈を無き、金次郎と權太夫と物語の最中
 へ、三人衆も悦びを述べんとて來る、臺所には百姓共が鈍たる聲を振り絞
 て「芽出度々々の若松様」を謠ふ聲高く聞こゆ

櫻町四千石恢復の曙光は斯る事によりて現はれぬ、金次郎は美事に激流を
乗り切りて、今しも彼岸に達せんとするなり



翁の道歌道俳 (二)

餌をばこぶ視のなきけの羽音には

日なあつゆも日なあくなり

ちう／＼となげき苦しむ聲聞け

鼠の地獄猫の極楽

第五章

(一)

衣服の襤褸を繕はんとするものは、まづ最も甚しく敝れ裂けたる處より始めざるべからず、家の破損を普請せんとする者は、まづ最も甚しく頽れ毀れたる處より手を着けねばならず、金次郎は此理に由つて、まづ横田村より仕法を教さぬ、横田村は三ヶ村の中にも、頽廢極まれる處なり

五十年前までは、戸數二百戸にも餘りたるべきが、今は僅かに八九十戸を剩すのみ、僅かに残れる八九十戸も、その日の生計さへ立て難ねるが多く、菜色は家に盈ち、飢餓は人の上に迫る、されば田地畑畑みな廢れて、至る處原野の如く、家も軒も皆な傾きて、宛ら鹽焼く小屋を見るが如し、鈍き日力なく照りて、枯木の影淡く亂るゝあたり、骨と皮ばかりに瘦せ窶れたる村人、海藻の様に敝れたる衣服を纏ひて、淋しく脊を曝らすを見る者、誰か亡國の感を起さざらん

金次郎は日ごとに此村を巡視して、真心より救済の事に當れど、尙その實功を見るは難かりき、尙その十分の救護を爲すまでには至らざりき。木枯の香寒く聞こゆる夕なりき、金次郎はこの村の庄屋圓藏の家へ入り來る。

「二宮先生ぢや」と圓藏は中の間より馳け出で、今日も御巡視でござりまするか、お役目とは申しながら御苦勞千萬に存じます。」

「いや、私などは只歩くばかりぢや、この寒いのに鋤鋤持て、荒田の開拓に出で居る者に比べては何んでもない、然し近來は村の者が私の云ふことを善く聞いて呉れるので、案外仕事の捗が行く、何よりも結構ぢや。」

「これも皆先生のお蔭でござります、此分で三四年も経てば、村中が上田ばかりになります。」

「どうか早く爲りたいものぢや」と金次郎は縁端に腰掛ける、家の者は番茶の香しきを汲み出で、

「まづ一つお喫りなされませ。」

「こりや香ばしい、番茶も焙じやうに由ては、上茶よりも旨く喫まれる、人も用ひ様ぢや、金も遣ひ様ぢや。」

「時に先生」と圓藏は垂頭きたる顔を擡げて「あなたにお願ひの筋がござります。」

「外ならぬお前の事ぢや、能きる事は聞いて進ぜう。」

「御存じでもござりませう、私家は當村の草分、代々庄屋を勤めます。」

「よく存じて居る。」

「それが近來は御覽の通りに疲弊、軒も柱も傾いて居ります、親共の時分には斯ほどでも無かつた、先祖代々普請にお心をお籠めなされたのが、私の代に至つて基礎に龜裂の入ることがあつてはならぬ、何とか普請を致さうと存じ、先年以來心懸けて少々の貯蓄を致したのでござります、大工の見積では、今二十兩ほど不足致すやうござります、先生に斯様な事お願ひ申すは、心苦しい至りでござります、決して御損は掛けませぬ、二三年の間二十兩だけお貸し下さること能きぬでござりませうかな。」

圓藏は思ひ込んで云ひぬ、金次郎は瞬きもせず其顔を見詰め居たるが

「お前幾歳になる」

「今年四十一歳になります」

「男の四十一は分別盛りぢや、もう一度考へて見ぬか」

「へえ」と圓藏は惘れ顔なり

「松明盡きて手に火の近くなつたのも思はず、いつまでも持て居る者があれば阿呆の骨頂ぢや、家が焼けるといふに、心を道具荷物に残して、身を焼くものがあれば馬鹿の天邊ぢや、大風で船の覆らんとする時は、上荷を捨て、それでも危い時は帆柱を伐る、これは一人前の人間の爲る事ぢや」

「へえ」と圓藏は頭を掻く

「お前の村は今が疲弊の骨頂に達して居る、炬火の料が盡きて居る、火はもう家の軒に付いて居る、然もお前は代々庄屋ぢや」

「左様でござります」

「全體村が斯程まで疲弊したのは、上に立つ者の徳が足らぬからぢや、その

責は庄屋にある。すれば村の爲めに身の皮を削ぐのが當然ぢや、身の皮を削いで村の難儀を救ふが務めぢや、それにお前は自分の家を普請するといふ、些と間違うて居りはせぬか」

圓藏は遂に口を噤みぬ、傾きたる軒に雀の鳴く音淋しかりき

(二)

金次郎は尙詞を續けぬ

「村に曲つた者があれば厚く訓へて直にする、邪なものがあれば、深く戒めて正しくする、懈怠漢があれば勵し、貧乏な者があれば施與をする、これは云ふにも足らぬ事ぢやが、頼る處のない者は憐み、法度に背かぬやう、悪い風儀に染まぬやう、御年貢はせつせと納め、先祖代々の墓石塔は大切に掃除する、爾うして村の中に少しの愛も無いやうにするが、庄屋たる身の務めでないか、村に美事善行あれば、その譽れは庄屋に歸する、政道行き届き、土地よく開け、村中が富み榮えて、一年三百六十日春風吹き満ち、何一つの争